宮城県文化財調査報告書第54集

湯坪遺跡発掘調査概報

昭和 53 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

東北電力株式会社宮城支店

湯坪遺跡発掘調査概報

序

我が国の経済は、高度成長から安定成長へと移行してまいりましたが、東北地方においては東北自動車道、東北新幹線および工業再配置等の産業基盤の整備により、今後さらに地域開発が促進され、それにともない電力の需要も大きく伸長してゆくことが予想されております。

当社では、このような状勢に対応し、長期的に安定した電力の供給を行なうために、500kv青葉幹線、常磐幹線の基幹送電線を建設することにいたしました。

この常磐幹線の経過地については、自然環境の保全面を重点的に配慮しながら選定してまいりましたが、川崎町今宿字上の台付近は、鉄塔建設適地のため、このたび丘陵先端の地点を選定させていただいたわけでございます。

同丘陵一帯は、湯坪遺跡として知名の地域でありますので、宮城県教育庁文化財保護課のご指導のもとに事前調査を行なった結果、発掘調査の上で記録保存の処置をとることにいたしました。

発掘調査は、宮城県教育庁に委託申しあげ、昭和52年８月以降実施してまいりましたが、調査面積が小面積にもかかわらず、縄文時代の土器、石器に加え住居跡も発見され、貴重な資料が収集されて、広範な湯坪遺跡の一端を知ることができましたことは誠に喜ばしい限りでございます。

本書は、その調査記録でありますが、学術教育の資料として、また今後の活動の指針としてご活用願えれば幸いに存じます。

最後にこの調査にあたりましてご尽力をいただきました関係者の方々に深く感謝申し上げる次第でございます。

昭　和　５２年　３月

東北電力株式会社宮城支店
支店長　岩　佐　　繁

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
　１．遺跡の位置と自然環境……1
　２．歴史的環境……1
Ⅲ　調査の方法および経過……3
　１．調査の方法……3
　２．調査の経過……3
Ⅳ　調査の成果……5
　１．基本層位……5
　２．発見された遺構と遺物……5
　　（１）住居跡……5
　　（２）土壙……19
Ⅴ　考察……26
Ⅵ　まとめ……28

例　　言

1. 本書は、東北電力送電施設である常磐幹線の鉄塔建設に伴う湯坪遺跡の発掘調査概報である。
2. 遺 跡 所 在 地：宮城県柴田郡川崎町今宿字上の台
3. 調 査 主 体 者：宮城県教育委員会、東北電力株式会社宮城支店
4. 調 査 担 当 者：宮城県教育庁文化財保護課　　調査員:佐々木安彦　丹羽　茂　一条孝夫　阿部博志
5. 調　査　期　間：昭和52年8月9日～9月7日
6. 調　査　面　積：約329㎡
7. 遺　跡　記　号：ＥＯ（宮城県遺跡地名表登録番号09023）
8. 調査協力機関：川崎町教育委員会
9. 本書における土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原:1967）、土性は国際土壌学会法の粒径区分によるものである。
10. 遺構の実測図は1/60（平面図・断面図）、土器・礫石器の実測図・拓影図は1/3、円板状土製品・石器（剥片石器）・剥片の実測図は1/2に縮尺を統一した。
11. 本書の執筆・編集は、宮城県教育庁文化財保護課職員の協議を得て一條孝夫が担当した。

Ⅰ　調査に至る経過

東北電力株式会社は東北地方の産業の発達や生活水準の向上による電力需要の増大に伴って発電所や幹線送電線の建設事業を推進してきた。県内の送電線については、女川原子力線・常磐幹線・青葉幹線・朝日幹線・陸羽幹線等の建設が予定されている。これらの建設計画地内に含まれる埋蔵文化財について、宮城県教育委員会は東北電力株式会社宮城支店長の依頼をうけて分布調査を実施してきた。

常磐幹線については、昭和51年8月24日に分布調査依頼があり、11月11日～12日に分布調査を行なった。この結果、川崎町今宿の鉄塔建設予定地が、湯坪遺跡にかかることが明らかとなった。湯坪遺跡は縄文時代中期の遺物を出土する周知の遺跡で、住居跡等の遺構の存在が予想された。このため、東北電力と県教委との間で保存のための協議を再三にわたって行なった。しかし、他の鉄塔建設との関連等から設計変更は困難であり、発掘調査による記録保存の措置をとることになった。

昭和52年7月1日、東北電力株式会社宮城支店長と県知事との間に委託契約書が締結された。そして、宮城県教育庁文化財保護課が調査担当者となり、川崎町教育委員会の協力を得て、昭和52年8月8日から発掘調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と自然環境（写真１－１）

湯坪遺跡は川崎町の中心部から西方約4.6kmの、柴田郡川崎町今宿字上の台に所在する。

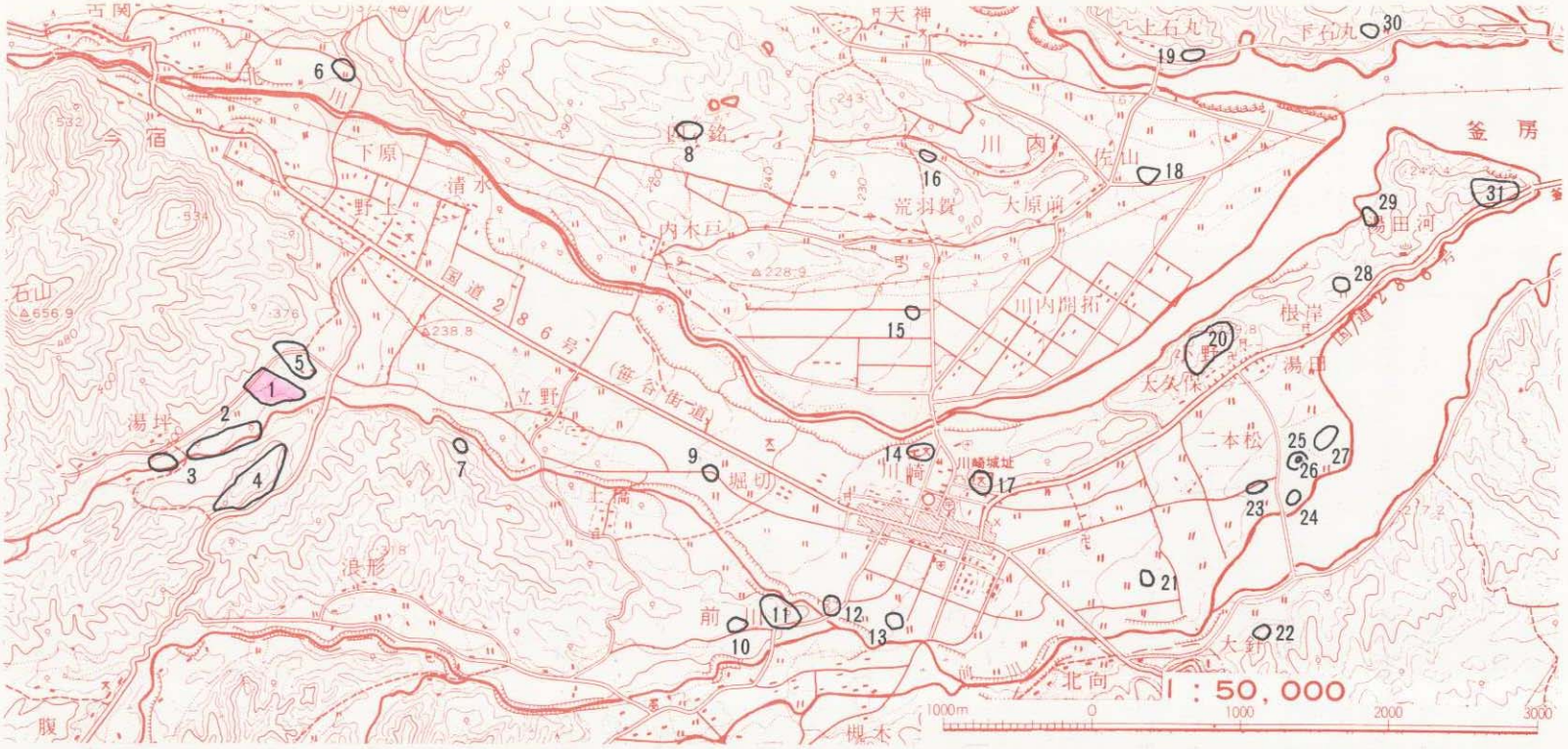
宮城県の西側には奥羽山脈が南北に走り、その東側にはいくつかの丘陵地帯が見られる。奥羽山地から東に延びる高館丘陵と青葉山丘陵は、名取川の支流である碁石川によって開析されその流域に川崎盆地が形成されている。川崎盆地は段丘と扇状地性の低地から成り、本遺跡は碁石川の支流である轟川によって形成された河岸段丘上に立地している。遺跡の立地する段丘は標高約270mで、ほぼ平坦であるが、緩やかに東側に傾斜している。遺跡の北側と南側には小さな谷があり、沢が流れている。

遺跡の現状は、平坦な部分が畑地や雑木林で谷の部分が水田となっており、縄文土器・石器などが散布している。

２．歴史的環境（第１図）

川崎町には現在67の遺跡が発見されている（宮城県教委：1972）。

縄文時代の遺跡は、ほとんどが太郎川、北川、前川によって形成された河岸段丘上などに立地しており、特に、前川流域に多く見られる。湯坪遺跡のすぐ南側に上の台遺跡（中期）があ



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡・名	時代
1	湯坪遺跡	縄文(中・高)	9	四本桜遺跡	弥生(?)	17	前川城跡(臥牛館 川崎要害)	江戸	25	河原田遺跡	縄文(前・晩) 奈良・平安
2	上の台遺跡	縄文(中)	10	羽根坂山遺跡	縄文(前・中・後)	18	中沢遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)弥生	26	河原田古墳	古墳(後)
3	湯坪B遺跡	奈良・平安	11	前川本城跡(錦ケ館)	中世	19	大森B遺跡	縄文(中・後)	27	下窪遺跡	縄文(早・中・晩) 弥(中)・奈良・平安
4	葭沢山遺跡	縄文	12	本屋敷遺跡	縄文(前・中)	20	小野城跡(牛ケ館)	江戸	28	愛宕山遺跡	奈良・平安
5	観音山遺跡	縄文(晩)	13	ガシャッポ遺跡		21	久保田遺跡		29	箕作遺跡	奈良・平安
6	下田遺跡	縄文(中・後) 奈良・平安	14	伊勢原遺跡	弥生(後)	22	大鉢遺跡	奈良・平安	30	下石丸遺跡	
7	立野横穴古墳	古墳(後)	15	荒羽賀遺跡	縄文(前) 奈良・平安	23	二本松遺跡	奈良・平安	31	荻ノ館跡	中世
8	丸森中沢遺跡	縄文(晩) 弥生・平安	16	丸森山遺跡	縄文(前・晩)	24	下新田古墳	古墳			

第1図 周辺の遺跡

り、北側に、晩期の土器を出土する遺跡がある。その他、下原遺跡（志間他：1970）・下窪遺跡（早期）・中沢遺跡・下田遺跡（中期・後期）・日向遺跡（晩期）等がある。なお、中沢遺跡からは住居跡が数軒発見されている（後藤他：1972）。

弥生時代の遺跡としては、伊勢原遺跡・高山官林遺跡・四本桜遺跡・中沢遺跡・大向遺跡・下窪遺跡・丸森中沢遺跡等がある。

古墳時代の遺跡としては、八幡古墳・立野横穴古墳等がある。

奈良・平安時代の遺跡としては、二本松遺跡・館山遺跡・東原遺跡等があるが、集落跡として確認された遺跡としては、下窪遺跡（後藤他：1970）がある。

中世の遺跡としては、大森館遺跡・前川本城跡・上楯城跡などがある。

Ⅲ　調査の方法および経過

１．調査の方法（第２・３図）

発掘調査に先だって湯坪遺跡周辺の表面採集調査を行なった。その結果、遺物の散布状況、地形などから遺跡の面積は約57,000㎡に及ぶことがわかった。

調査の対象範囲は遺跡全体の北東端で、鉄塔が建設される329㎡である。

調査は鉄塔建設の中心杭を原点にして、これを通る東－西、南－北の直交する基準線を設定し、3m単位のグリッドを組んだ。原点の北側を10区、南側を11区、西側をM区、東側をN区とし、それを延長してグリッド名を付した。

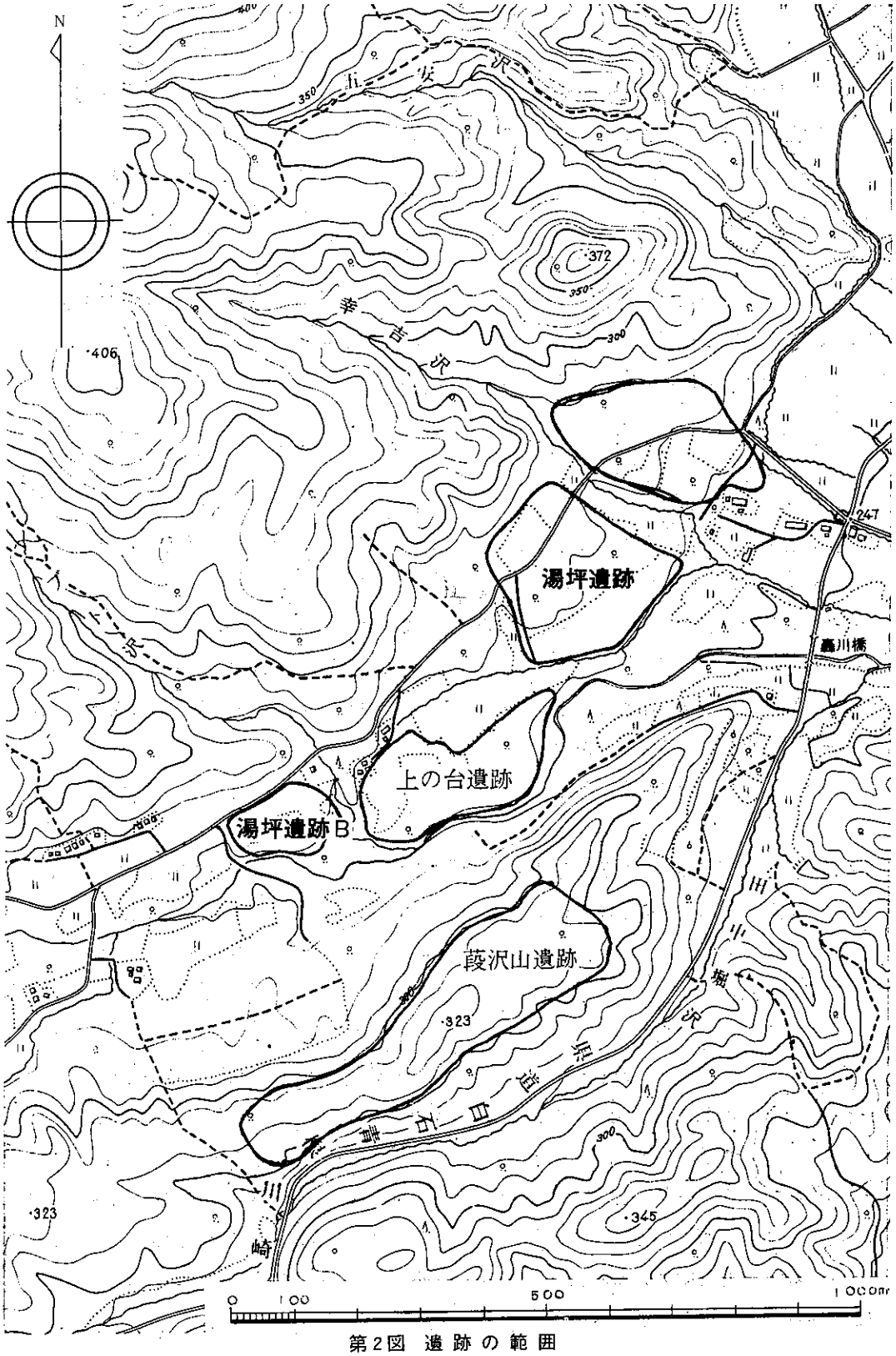
このようにして、発掘調査を実施したわけであるが、さらに実測図作成のため、次のような方法をとった。

先に設定した原点の東側をE、西側をW、北側をN、南側をＳとして遣り方を設定した。そして、調査区全体の1/20の平面図を作成した。また、発見された遺構と調査区の基本層位については1/20の断面図を作成した。

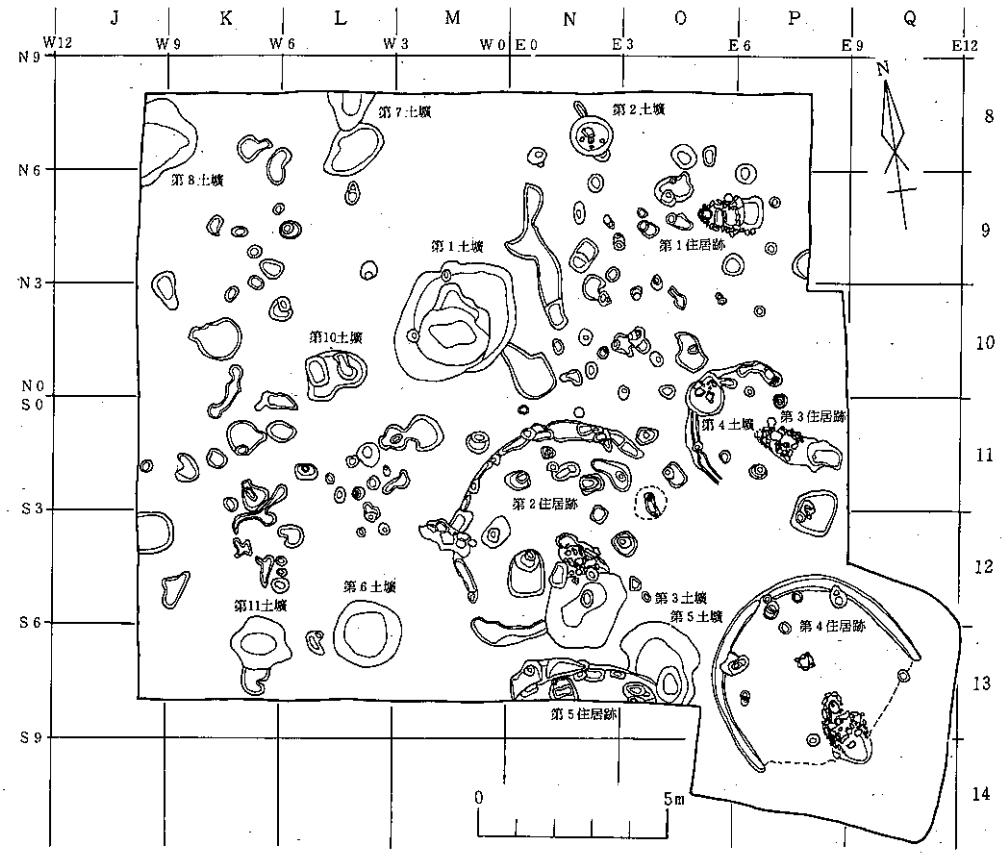
２．調査の経過

調査は８月８日から開始した。

発掘調査は調査区全体の表土を掘り下げ、遺構・遺物がどのように分布するかを確認することに主眼をおいて進めた。その結果、表土下に遺物を含む層が２層確認された。遺物は縄文時代中期後葉～後期前葉のものが出土したが、量的には後期前葉のものが多かった。掘り下げを進めていくと、第２層中で土壙が確認され、さらに地山面で土壙と住居跡等が確認された。遺構の調査が進み精査がほとんど終了した９月４日に、調査の経過と成果を一般に公開するため発掘現場において説明会を行なった。遺構の精査終了後、記録作成を行ない、調査区全体の平面図断面図を作成した。また、写真による記録も行なった。


N
湯坪遺跡
上の台遺跡
湯坪遺跡B
葭沢山遺跡
372
406
323
345
350
300
嘉川橋
0
100
500
1000m

第2図 遺跡の範囲



第３図　遺 構 配 置 図

以上の様な経過で、発掘調査は９月７日に一切を終了した。

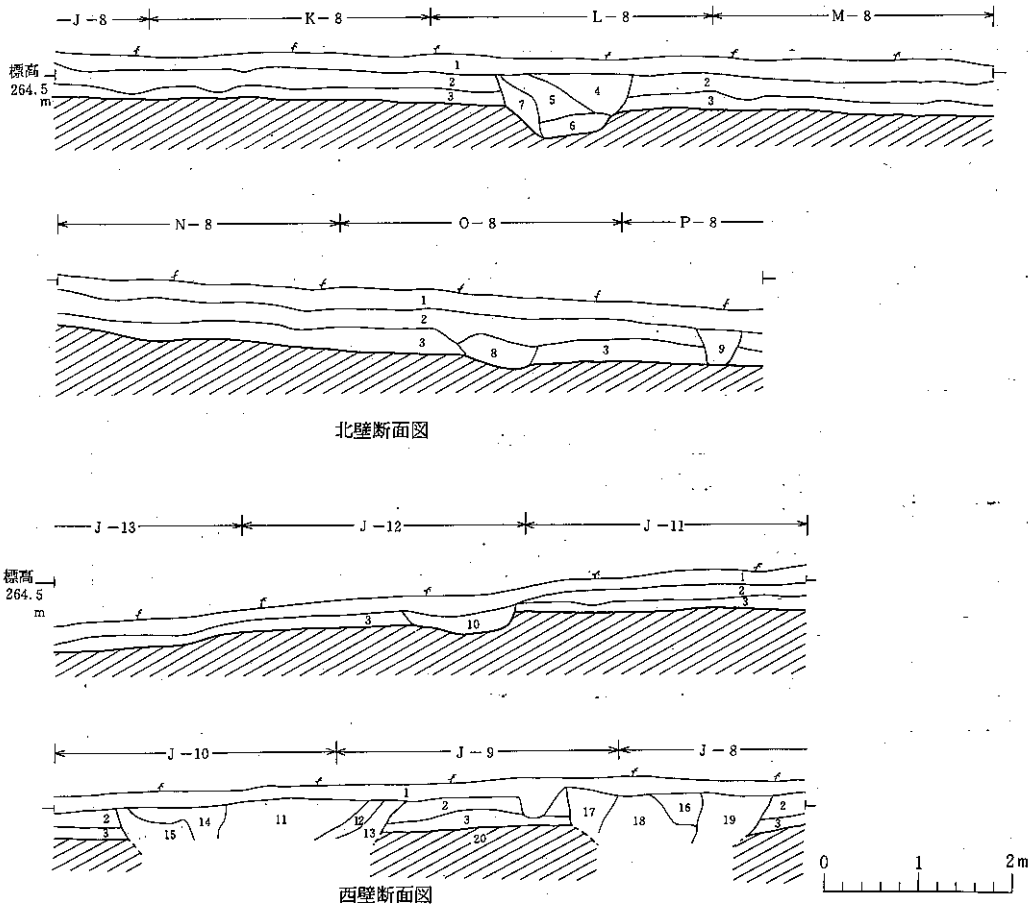
Ⅳ　調査の成果

１．基本層位（第４図）

調査区の基本層位は４層確認された。第Ⅰ層は黒褐色土層である。第Ⅱ層は黒色土層で暗褐色の土をブロック状に含む。第Ⅲ層は暗褐色土層で褐色の地山の土をブロック状に含む。第Ⅳ層は明褐色火山灰層（地山）である。各層の分布を見ると、第Ⅰ層は10～25cmの厚さで全面に見られる。第Ⅱ層は20～25cmの厚さで北西側ほど厚く、南側に行くほど薄くなり、ついには消えてしまう。第Ⅲ層は10～30cmの厚さで全面に見られる。第Ⅳ層は地山で、北西から南東方向に緩く傾斜している。第Ⅱ、第Ⅲ層からは縄文土器片・石器等が出土しているが、これらの出土状況には特に規則性は認められない。いくつかの遺構が発見されたがそれらの中には、第Ⅱ層上面で確認されたものと地山面で確認されたものがある（写真１－２）。

２．発見された遺構と遺物

（１）住居跡



層No.	土色	土性	混入物・その他	備考
1	黒色(7.5YR 2/1)	シルト	表土	基本層位第Ⅰ層
2	黒色(7.5YR 3/1)	シルト	暗褐色(7.5YR 3/3)の土をブロック状に含む	〃 第Ⅱ層
3	暗褐色(7.5YR 3/3)	シルト	褐色(7.5YR 4/4)の地山の土をブロック状に含む	〃 第Ⅲ層
4	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	木炭を含む 褐色(7.5YR 4/4)の地山の土をブロック状に含む	第7土壌内堆積土
5	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	〃 〃	〃
6	明褐色(7.5YR 5/6)	シルト	パミスを含む	〃
7	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	褐色(7.5YR 4/4)の地山の土をブロック状に含む	〃
8	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	木炭をわずかに含む 褐色(7.5YR 4/4)の地山の土をブロック状に含む	
9	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	木炭を含む 暗褐色(7.5YR 3/4)の土をブロック状に含む	ピット内堆積土
10	暗褐色(10YR 3/3)	シルト		土壌内堆積土
11	褐色(7.5YR 4/4)	シルト	パミスを含む 地山の土に近似している	第9土壌内堆積土
12	褐色(7.5YR 4/4)	シルト	パミスを含む	〃
13	黒色(7.5YR 3/2)	シルト	暗褐色(7.5YR 3/3)の地山の土をブロック状に含む	〃
14	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	〃	〃
15	黒色(7.5YR 3/2)	シルト	〃	〃
16	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	褐色(7.5YR 4/4)の地山の土をブロック状に含む	第6土壌内堆積土
17	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	〃	〃
18	褐色(7.5YR 4/4)	シルト	パミスを含む	〃
19	黒色(7.5YR 3/2)	シルト	褐色(7.5YR 4/4)の地山の土をブロック状に含む	〃
20	明褐色(7.5YR 5/6)	ローム	地山	基本層位第Ⅳ層

第4図 基本層位

①第１住居跡（第５・６図、写真１－３、３－３）

（遺構の確認）０－９区付近の地山面で炉を検出し、住居跡を確認した。

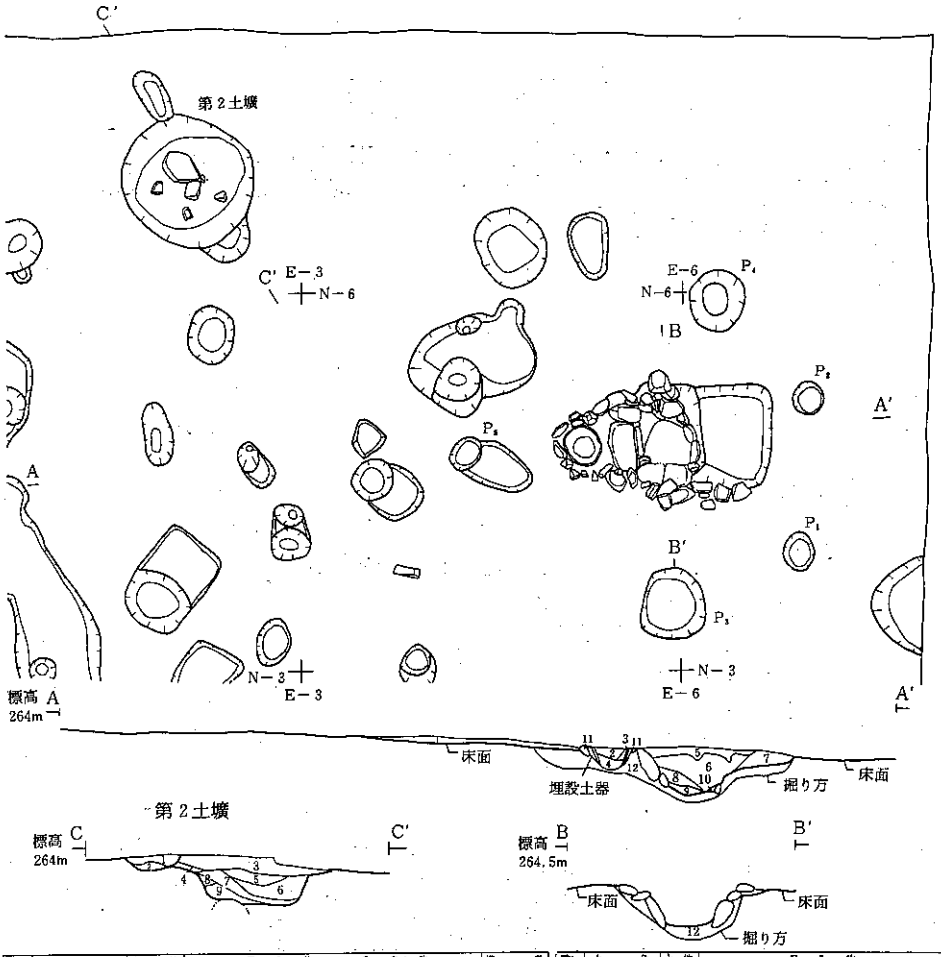
（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）床面の広がりがつかめず不明である。

（堆積土）黒褐色シルト層の１層だけ確認された。炉跡付近に約４cmの厚さで分布していた。

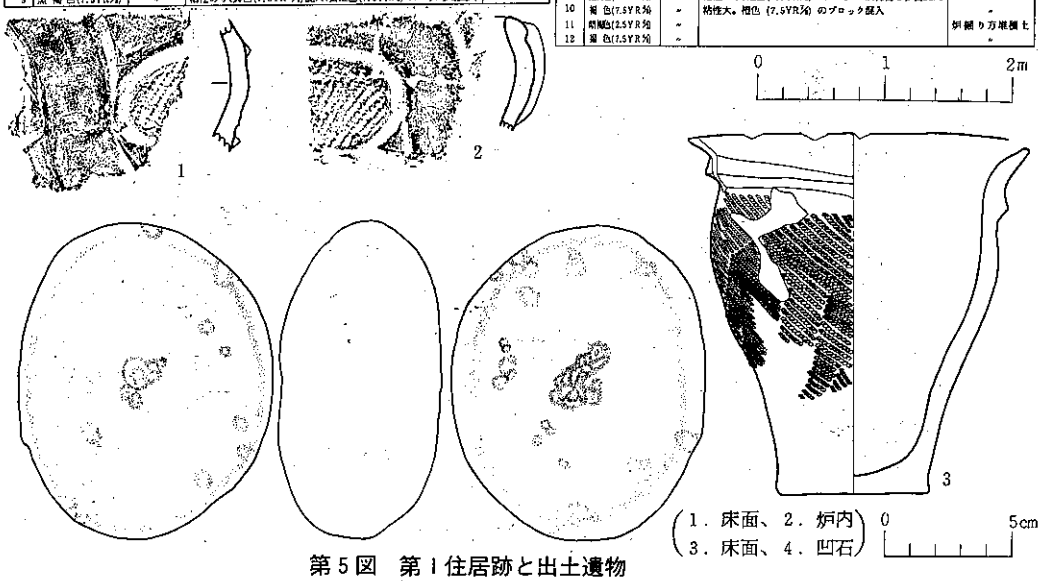
（壁の状況）壁は検出できず。

（床面）多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦で、緩やかに南東方向に傾斜している。貼り床は認められず、床面は地山の黄褐色火山灰である。しかし、その範囲は、壁等が検出されず、つか



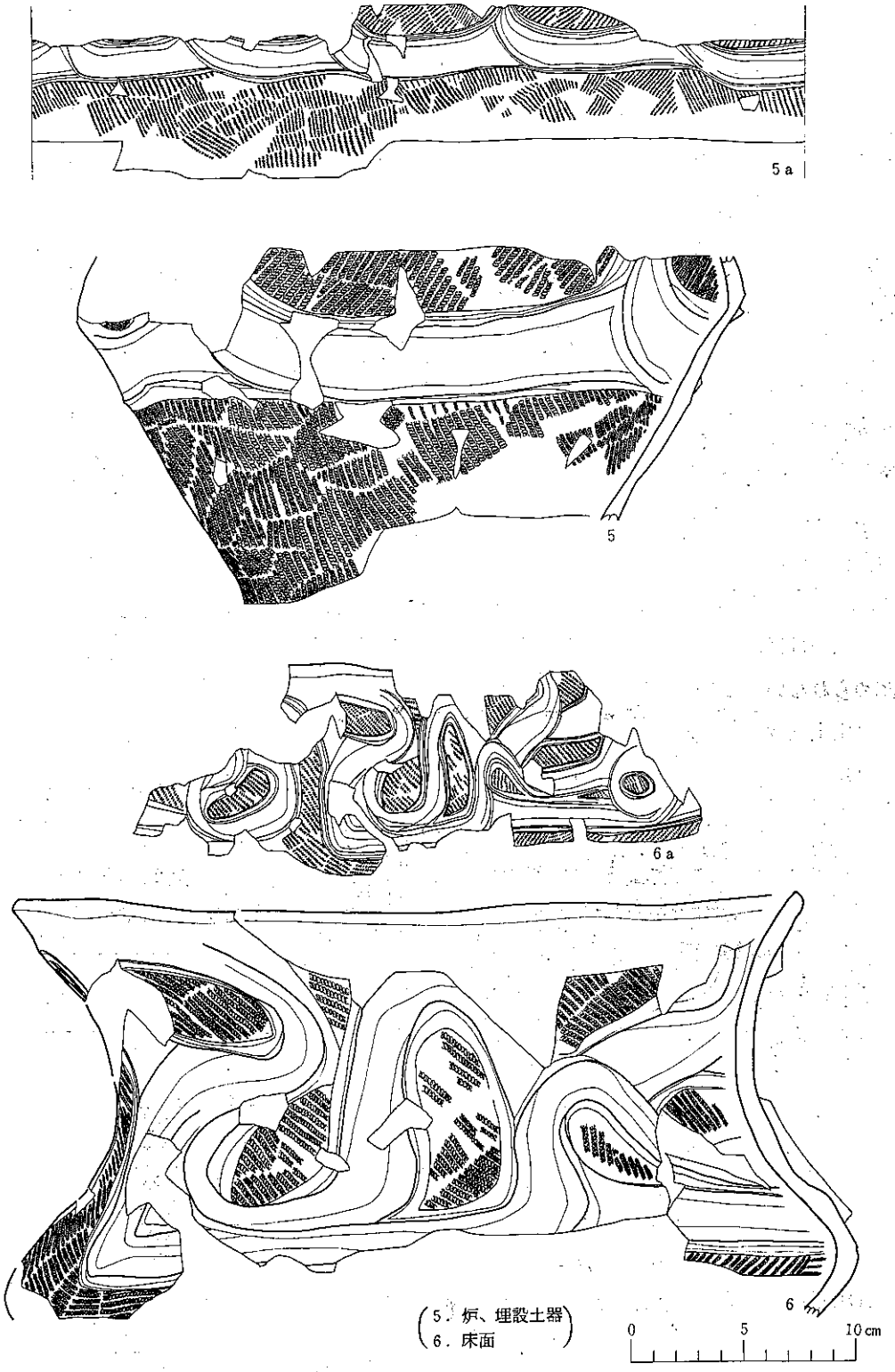
層No.	土色	土性	混入物・その他	備考
1	赤黒色(2.5YR2/1)	シルト	粘性あり、橙色(7.5YR7/6)のブロック混入	ピット内埋積土
2	明褐色(7.5YR5/6)	〃		〃
3	黒色(7.5YR2/1)	〃	炭化物混入	土壙内埋積土
4	黒褐色(7.5YR3/4)	〃	粘性大。橙色(7.5YR7/6)を多量混入	〃
5	黒褐色(7.5YR3/2)	砂質シルト	暗赤褐色(5YR3/6)の大ブロック混入	〃
6	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	暗赤褐色(5YR3/6)橙色(7.5YR6/6)のブロック・炭化物を多量混入	〃
7	黒褐色(7.5YR3/4)	〃	黒色(7.5YR3/4)を多量混入	〃
8	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	黄橙色(7.5YR7/8)のブロック多量混入	〃
9	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	粘性あり、黄色(7.5YR7/2)混入、黄橙色(7.5YR7/8)のブロック少量混入	〃

層No.	土色	土性	混入物	備考
1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	粘性あり。	住居内埋積土
2	赤褐色(10YR5/6)	〃		埋設土器内埋積土
3	黄褐色(7.5YR5/3)	〃		〃
4	暗褐色(7.5YR3/3)	〃	炭化物混入	〃
5	黒褐色(10YR3/2)	〃	粘性あり	炉内埋積土
6	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	黄橙色(7.5YR8/6)のブロック・黒色(7.5YR1.7/1)を小量混入	〃
7	黒褐色(7.5YR3/3)	〃	黄橙色(7.5YR8/8)の大きいブロックあり	〃
8	黒褐色(7.5YR3/3)	〃		〃
9	黒褐色(7.5YR3/3)	〃	粘性あり。橙色(7.5YR7/6)のブロック・炭化物を多量混入	〃
10	褐色(7.5YR5/3)	〃	粘性大。橙色(7.5YR7/6)のブロック混入	〃
11	暗褐色(2.5YR3/3)	〃		炉掘り方埋積土
12	褐色(7.5YR5/3)	〃		〃



(1. 床面、2. 炉内
3. 床面、4. 凹石)

第5図　第1住居跡と出土遺物



第6図　第Ⅰ住居跡出土遺物

めなかった。

（柱穴）床面と考えられる炉跡周辺にはいくつかのピットが検出された。それらのうちに掘り方と柱痕跡が確認できたものはなかった。しかし、ピット内の堆積土・大きさ・深さ・配置等から考えると、P_3・P_4・P_5・P_1・P_2が柱穴となる可能性がある。

（周溝）検出されず、不明である。

（炉）住居跡の範囲がつかめず、住居跡内での相対的位置関係は不明である。長軸方向は西－東である。この炉は、土器埋設石囲部、石組部Ⅰ、石組部Ⅱから構成されている土器埋設石組複式炉である。大きさは長軸1.75m、短軸1.1mである。埋設土器は１個で、口縁部・底部が欠損した深鉢形土器を使用している。土器内部からは焼土や炭化物が検出された。土器や周囲の石もかなり焼けていた。石組部Ⅰは奥壁・両側壁・石組部Ⅱと接する部分から成る。奥壁は板状の大きな石を使用しており、両側壁は礫を数段積み上げている。石組部Ⅱと接する部分は両者を区画する石を一列配置している。底面は丸底状で、炭化物が貼りついたように付着していた。石組部Ⅰからは焼土は検出されていないが、奥壁と側壁の石は亀裂が生じており、かなり火熱を受けたものと思われる。石組部Ⅱの南側壁には石組が見られるが、北側壁には見られない。底面はほぼ平坦であるが、石組部Ⅰに向かって緩く傾斜している。特に顕著な使用痕跡は認められない。この炉を断ち割ると掘り方が検出された。

（出土遺物）床面からつぶれた形で土器が２点、凹石３点、石皿１点等が出土している。

（年代決定資料）炉埋設土器及び床面出土の土器が住居跡の年代を考える資料である。

②第２住居跡（第７・８図、写真２－１）

（遺構の確認）Ｎ－12区付近で炉を検出し、住居跡を確認した。

（重複・増改築）西側周溝部分が時期不明の敷石遺構により切られている。また、第３土壙により、炉及び住居跡南側部分が切られている。

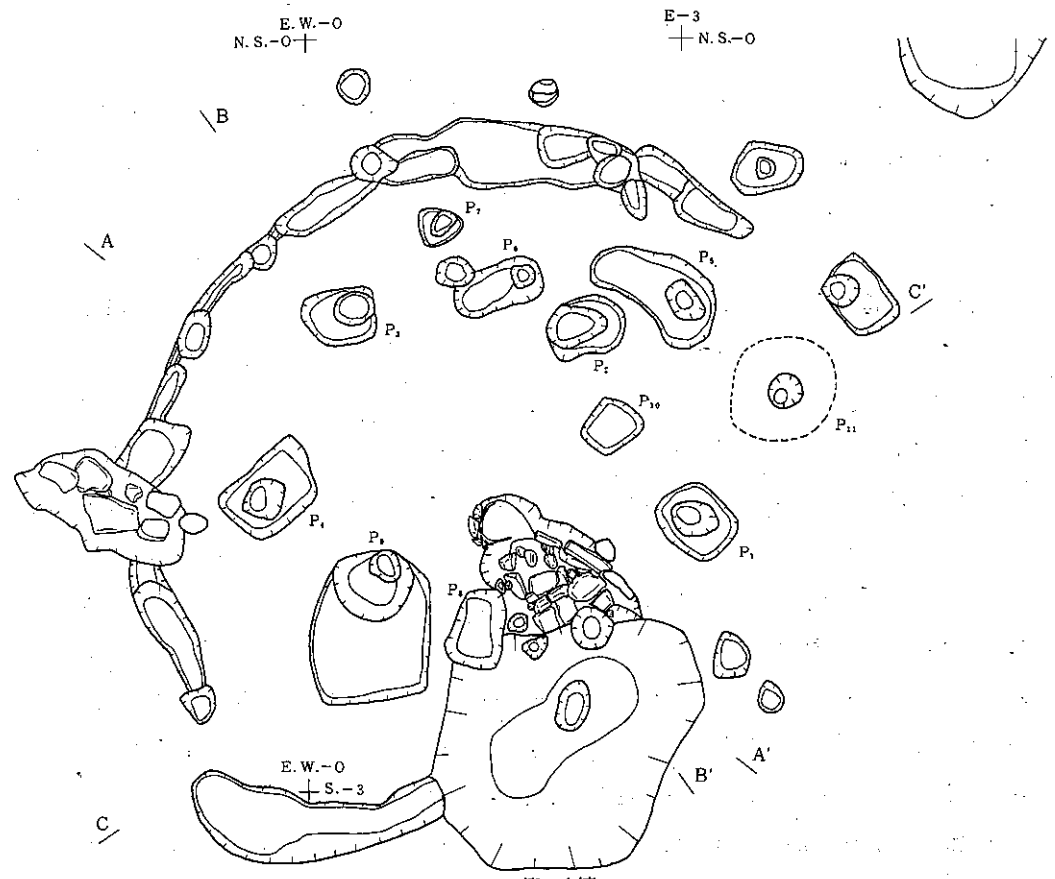
（平面形・方向）東～南側が攪乱を受けているが、残存している壁及び周溝から円形または楕円形と推定される。

（堆積土）２層確認された。第１層の黒色シルト層は炉付近に分布し、第２層の暗褐色シルト層は壁際に分布していた。

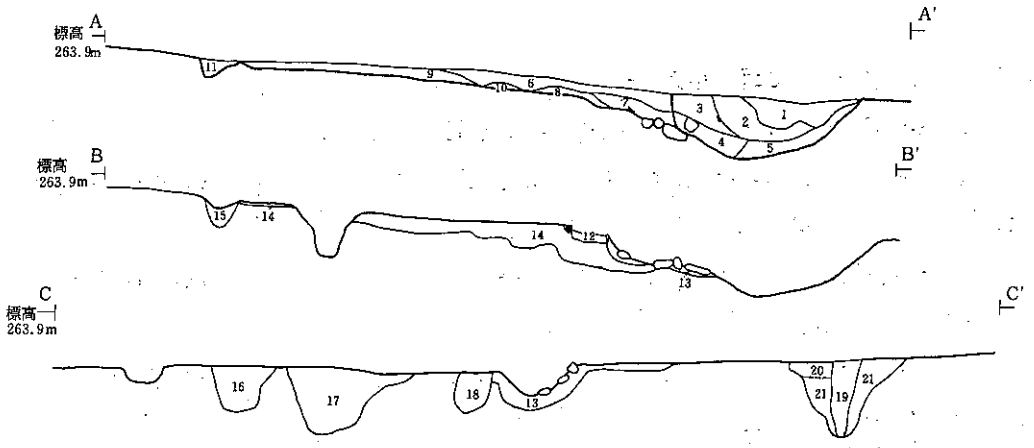
（壁の状況）西側から北側の壁が検出されたが、東～南側は削平あるいは土壙に切られ検出できなかった。残存している壁は北側が最も高くて約10cmある。西方向にいくに従い低くなる。

（床面）床面はほぼ平坦で全体的に南東方向に傾斜している。この床面下には掘り方が認められる。

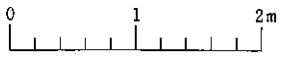
（柱穴）住居内にピットは18個検出された。そのうち、掘り方と柱痕跡の確認されたものは



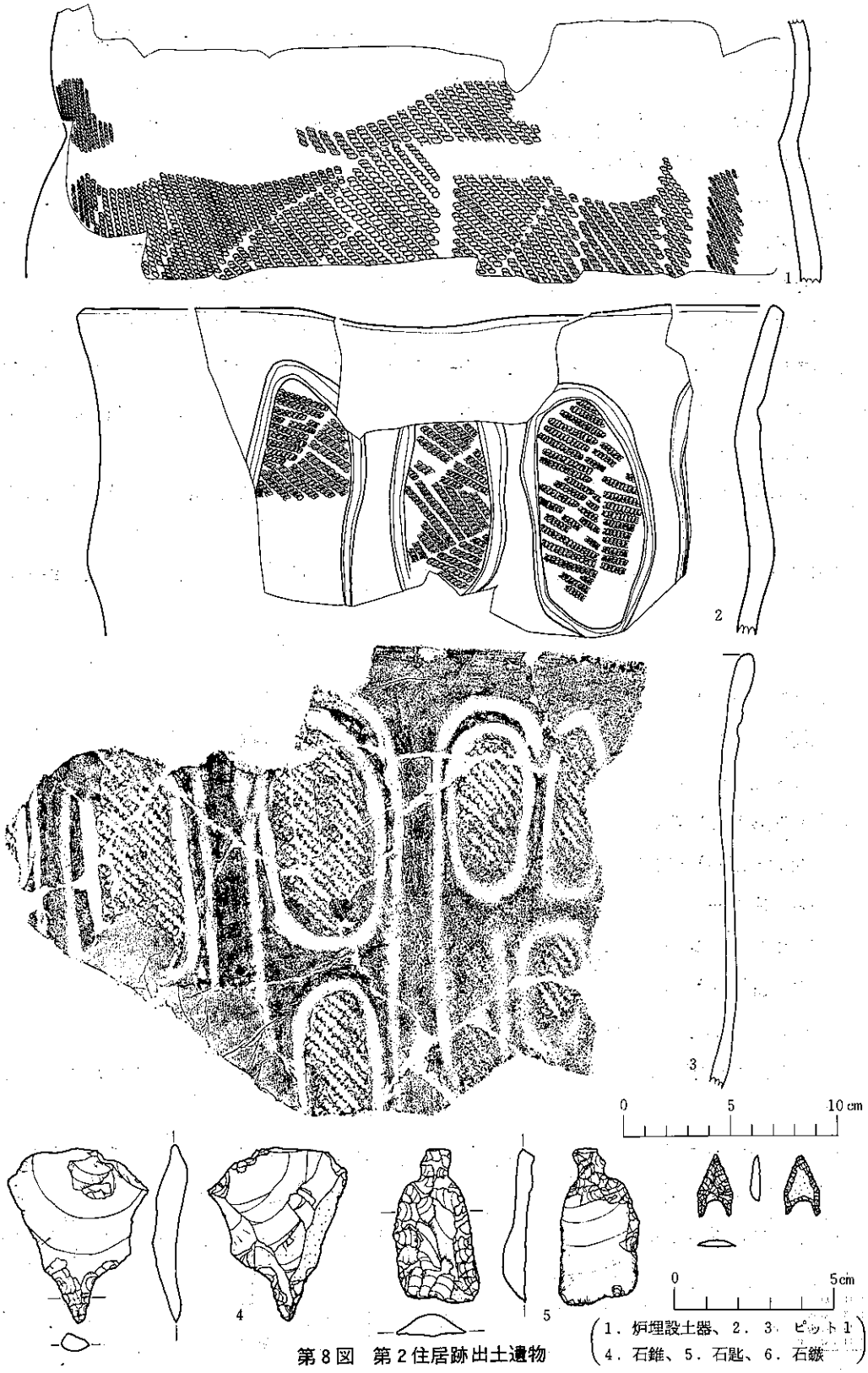
第3土壙



層No.	土色	土性	混入物その他	備考
1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	大礫を混入	土壙3堆積土
2	褐色(7.5YR4/4)	〃	黒褐色(7.5YR3/2)をブロック状に混入。パミスを混入	〃
3	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	褐色(7.5YR4/4)をブロック状に混入	〃
4	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	褐色(7.5YR4/4)をブロック状に混入。木炭・焼土粒を混入	〃
5	褐色(7.5YR4/4)	〃	パミスを混入	〃
6	黒色(7.5YR2/1)	〃	木炭を混入	住居内堆積土
7	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	焼土粒・パミスを混入	炉内堆積土
8	暗褐色(7.5YR3/3)	〃	褐色(7.5YR4/4)をブロック状に混入	〃
9	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	パミスを混入	住居内堆積土
10	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	〃	〃
11	褐色(7.5YR4/4)	〃	パミスを混入	周溝内堆積土
12	赤褐色(5YR4/6)	〃	焼土	壁殺土器内堆積土
13	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	焼土を混入	炉掘り方堆積土
14	褐色(7.5YR4/4)	〃	木炭を混入	住居縁り方堆積土
15	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山の土をブロック状に混入	周溝内堆積土
16	褐色(7.5YR4/4)	〃	パミスを混入	住居縁り方堆積土
17	褐色(7.5YR4/4)	〃	地山の土をブロック状に混入	〃
18	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	木炭を混入	ピット内堆積土
19	褐色(7.5YR4/4)	〃		柱痕跡
20	暗褐色(7.5YR3/4)	〃		柱穴掘り方堆積土
21	褐色(7.5YR4/4)	〃		〃



第7図　第2住居跡



第８図　第２住居跡出土遺物

（１．炉埋設土器、２．３．ピット１
４．石錐、５．石匙、６．石鏃）

P_1・P_2・P_3・P_4・P_5・P_6・P_{11}である。P_7・P_{10}は浅く柱穴とは考えられない。堆積土の状況、配置等から見ると、柱穴は、P_1・P_2・P_3・P_4である。

（周溝）北側から西側にかけて検出された。南側でも、周溝と思われる溝が検出されたが、この住居跡に伴うかどうかは不明である。

（炉）住居跡の南東部分に位置し、長軸は北西－南東である。土壙３に切られるなど攪乱を受けている。基本的には土器埋設石囲部、敷石石組部から成っている土器埋設石組複式炉である。大きさは現存長で長軸1.2m、短軸0.9mである。埋設土器は１個で、西～南側しか残存しておらず、その周囲の石も西側しか残っていない。土器はかなり焼けてその内部には焼土が厚く堆積していた。炭化物も検出された。敷石石組部は南側が土壙３に切られており、側壁の上部の石もくずれていた。なお、使用された石は火熱を受け亀裂を生じていた。炉を断ち割ると掘り方が検出された。

（出土遺物）床面、ピット等から一括土器が出土している。その他、石鏃・石匙・石錐等も出土している。

（年代決定資料）埋設土器・床面・ピット内出土の一括土器等が住居跡の年代を示す資料である。

③第３住居跡（第９図、写真２－２）

（遺構の確認）Ｐ－11区付近の地山面で炉跡が検出され、住居跡が確認された。

（重複・増改築）住居跡の北西部が第４土壙により切られている。また、炉の東側がピット６により切られている。

（平面形・方向）住居跡の東～南側が削平されているため、全体的な形は不明であるが、残存壁から、円形を基調としたものと思われる。

（堆積土）褐色シルト層のみである。炉跡周辺から北西部に分布する。

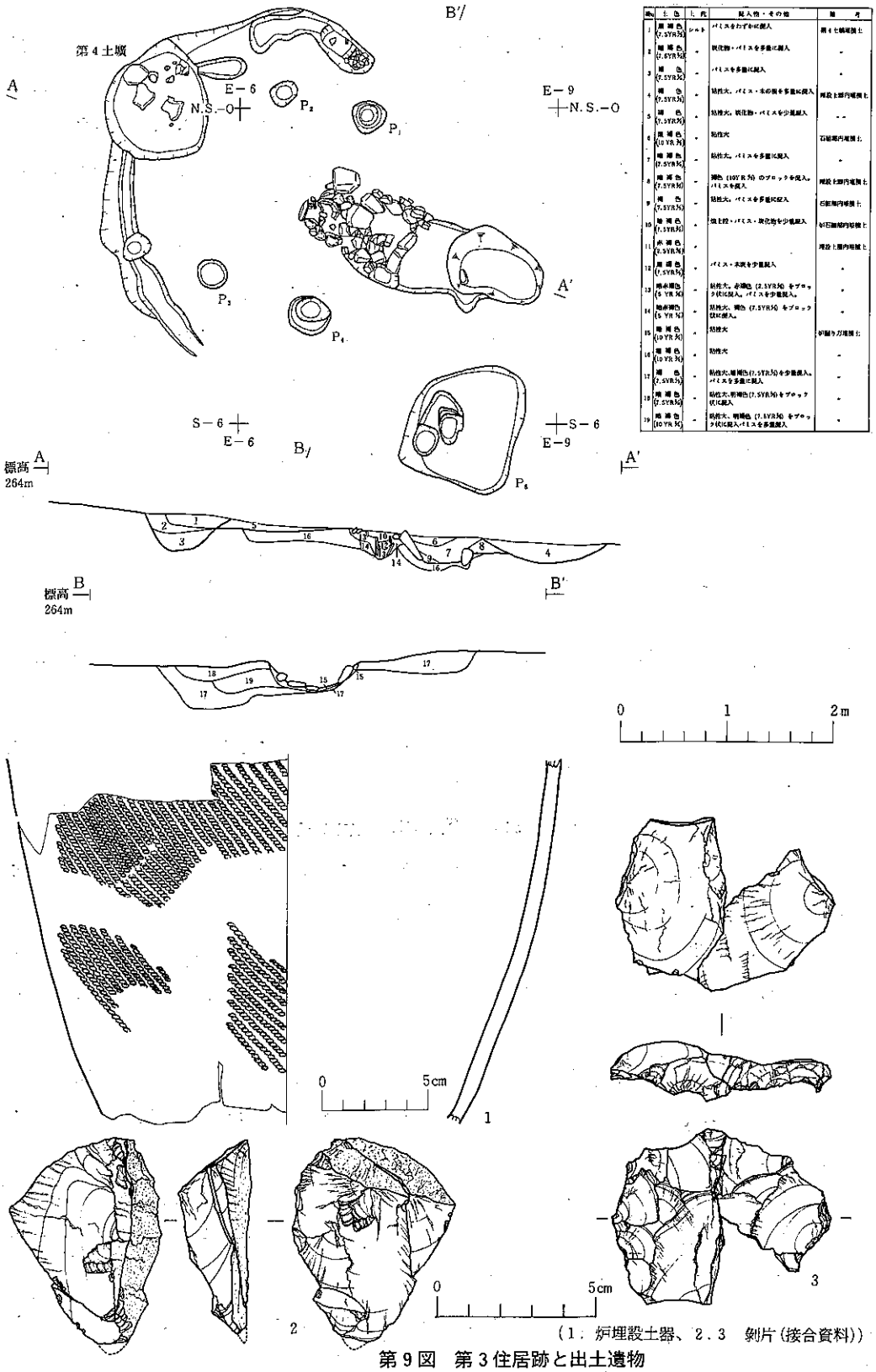
（壁の状況）北側から西側にかけて検出されたが、一部第４土壙に切られている。残存している壁高は西側部分で約10cmである。

（床面）床面は南西側に傾斜している。住居跡掘り方に埋めた褐色シルト層を固めて床面としている。

（柱穴）住居内にはピットが合計６個検出された。このうち掘り方、柱痕跡が確認できたのはP_1とP_4である。

（周溝）壁に沿って断続的に検出された。床面はほぼ平坦である。床面からの深さは５～10cmである。

（炉）住居跡の南東部に位置し、長軸は、北西－南東である。炉は、土器埋設石囲部・敷石石



No.	土色	土性	混入物・その他	備考
1	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	パミスをわずかに混入	耕土 地山ローム
2	暗褐色 (7.5YR3/3)	〃	炭化物・パミスを多量に混入	〃
3	褐色 (7.5YR4/4)	〃	パミスを多量に混入	〃
4	褐色 (7.5YR4/4)	〃	粘性大。パミス・赤の斑を多量に混入	埋設土器内埋土
5	褐色 (7.5YR4/4)	〃	粘性大。炭化物・パミスを少量混入	〃
6	黒褐色 (10YR3/2)	〃	粘性大	石組炉内埋土
7	暗褐色 (7.5YR3/3)	〃	粘性大。パミスを多量に混入	〃
8	暗褐色 (7.5YR3/3)	〃	褐色 (10YR5/6) のブロックを混入。パミスを混入	埋設土器内埋土
9	褐色 (7.5YR4/4)	〃	粘性大。パミスを多量に混入	石組炉内埋土
10	暗褐色 (7.5YR3/3)	〃	焼土粒・パミス・炭化物を少量混入	炉石組炉内埋土
11	赤褐色 (2.5YR4/6)	〃		埋設土器内埋土
12	黒褐色 (7.5YR3/2)	〃	パミス・赤斑を少量混入	〃
13	暗赤褐色 (5YR3/4)	〃	粘性大。赤褐色 (2.5YR3/6) をブロック状に混入。パミスを少量混入。	〃
14	暗赤褐色 (5YR3/4)	〃	粘性大。褐色 (7.5YR4/6) をブロック状に混入。	〃
15	暗褐色 (10YR3/3)	〃	粘性大	炉掘り方埋土
16	暗褐色 (10YR3/3)	〃	粘性大	〃
17	褐色 (7.5YR4/4)	〃	粘性大。暗褐色 (7.5YR3/3) を少量混入。パミスを多量に混入	〃
18	暗褐色 (7.5YR3/3)	〃	粘性大。明褐色 (7.5YR5/6) をブロック状に混入	〃
19	暗褐色 (10YR3/3)	〃	粘性大。明褐色 (7.5YR5/6) をブロック状に混入。パミスを多量混入	〃

（1：炉埋設土器、2．3　剝片（接合資料））

第9図　第3住居跡と出土遺物

組部・掘り込み部から成る土器埋設石組複式炉である。大きさは現存長で、長軸約1.5m、短軸約0.85mである。埋設土器は１個で周囲からの圧力によりつぶれた状態で検出された。土器の周囲の石もくずれていた。埋設土器は熱を受けてかなりもろくなっており、内部からは多量の焼土と炭化物が少量検出された。周囲の石も熱を受けている。敷石石組部は方形の石組部分とそれに囲まれた敷石部分から成るが、原形をとどめておらず、南側石組がくずれていたり、石が抜きとられたりしている。床面も北側半分には敷石は見られない。奥壁・側壁の石はともに熱を受けて亀裂が生じている。床面から底面までの深さは約17cmである。掘り込み部はほぼ平坦で、床面からの深さは約10cmである。ここでは、熱を受けた痕跡は観察されなかった。東側部分がピット６により切られている。炉を断ち割ると掘り方が検出された。

（出土遺物）剥片20数点が一括して出土している。

（年代決定資料）炉埋設土器が住居跡の年代を示す資料である。

④第４住居跡（第10・11図、写真２－３）

（遺構の確認）Ｐ－13区付近で黄褐色火山灰層の地山に半円形の暗褐色シルト層の分布を確認した。

（重複・増改築）他の遺構との重複は認められなかった。また、増改築の明瞭な痕跡は確認できなかった。

（平面形・方向）南東部分が斜面及び削平のため不明である。残存部から推定すると、平面形はほぼ円形になると思われる。

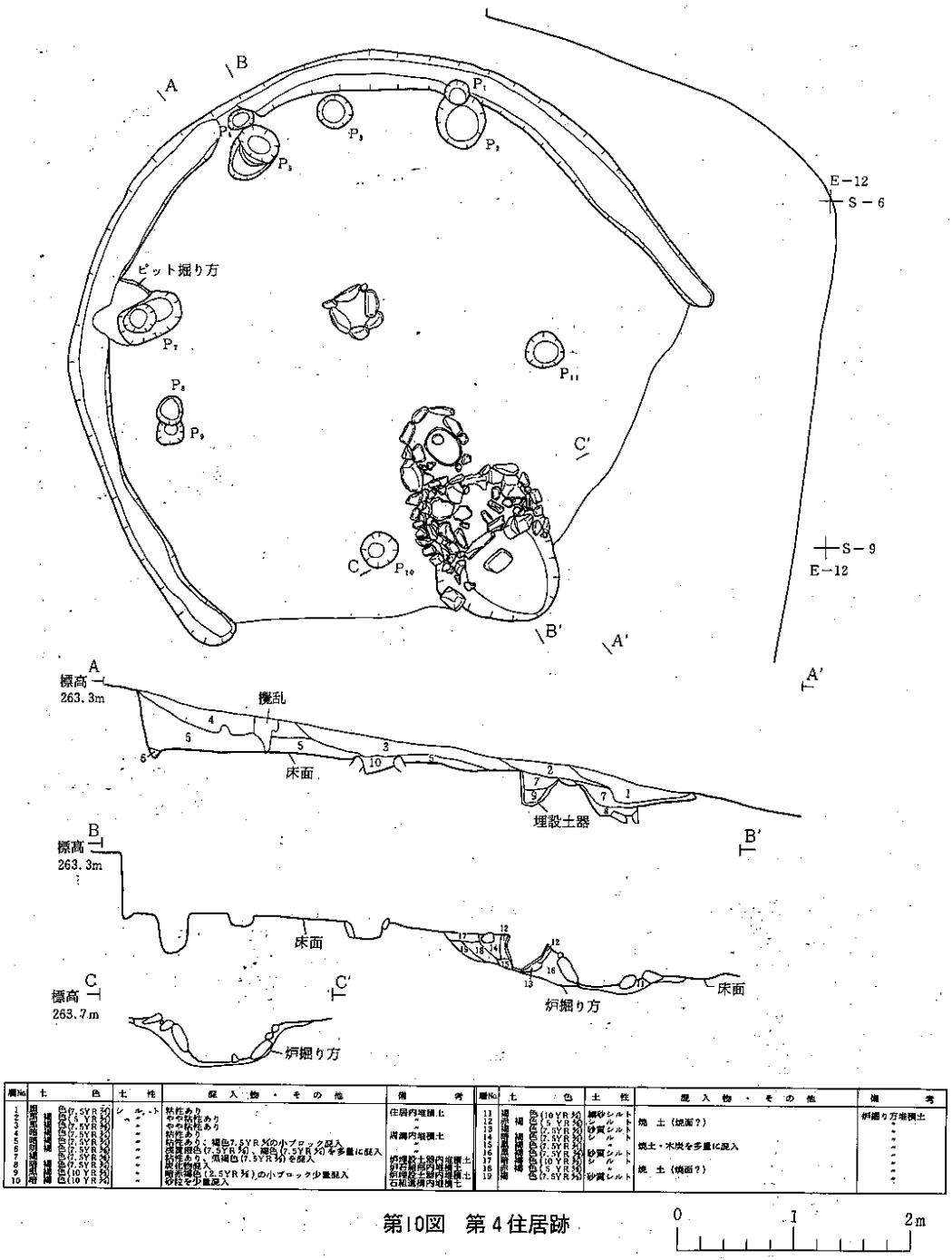
（堆積土）基本的には３層に大別される。第Ⅰ層は黒色土層で住居跡南東部分に堆積している。第Ⅱ層は暗褐色土層で住居跡中央部とその北側に堆積している。第Ⅲ層は暗褐色土層で住居跡中央部を除いた北・西・南側から壁沿いに堆積している。

（壁）住居跡の北・西・南側の一部で残っていた。最も保存の良いのは北西壁で、床面からの高さは約50cmである。壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。壁は地山の黄褐色火山層である。

（床面）床面はほぼ平坦であるが、わずかに南東方向に傾斜している。また、全体として貼り床や敷石などは認められず、地山である。床面としての地山は炉跡の北西側が固くしまった黄褐色火山灰層であるが、南東側は砂礫層となっている。

（柱穴）床面で確認されたピットは合計11ある。このうち、掘り方と柱痕跡の識別ができたものはP_5・P_7である。また掘り方と柱痕跡の識別はできなかったもののうち、配置などから柱穴と考えられるものはP_2・P_{11}・P_{10}である。

（周溝）竪穴壁の残存部とその延長上の僅かな部分に残っていた。幅は20～30cmで底面はほ



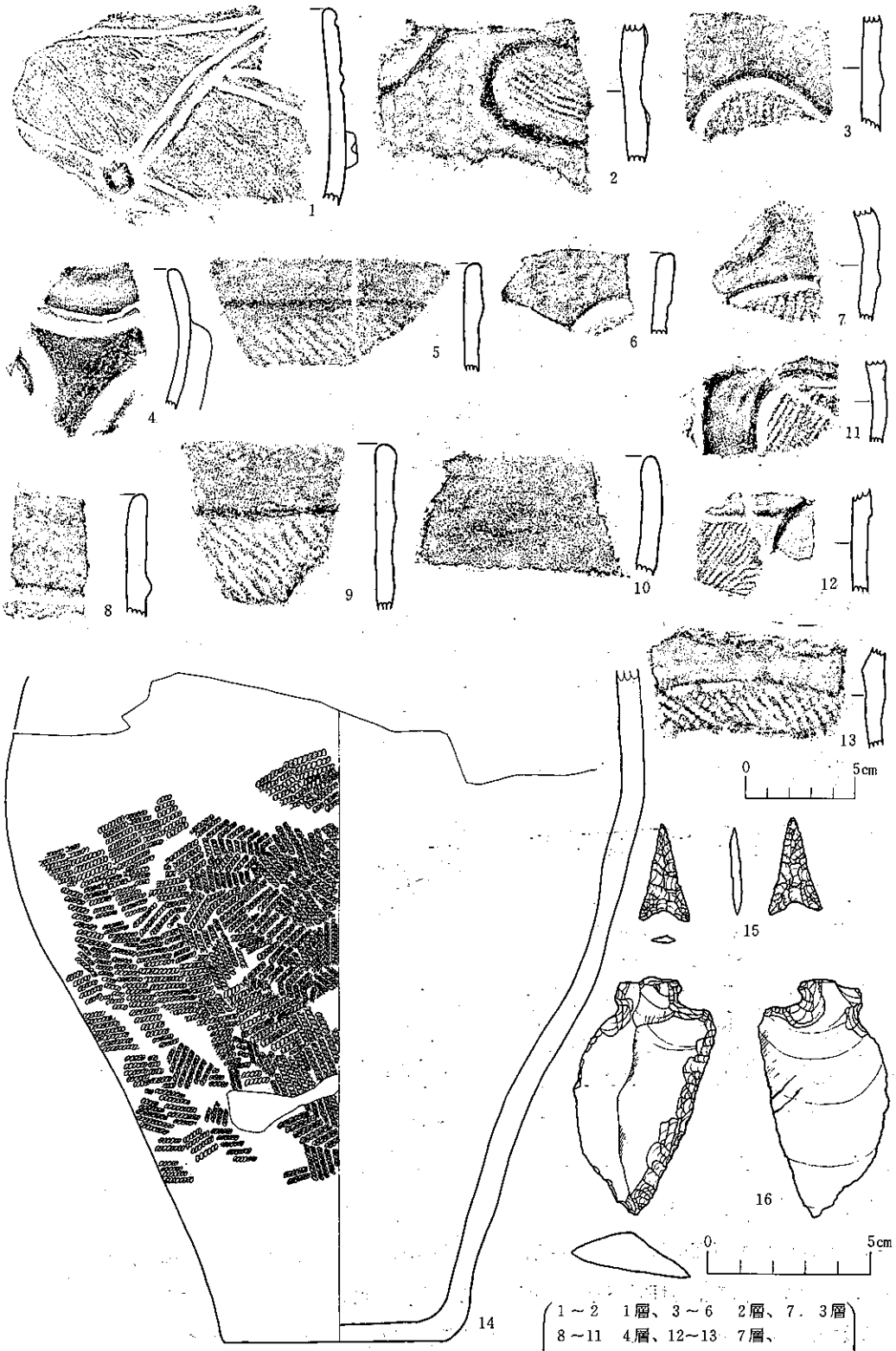
層No.	土色	土性	混入物・その他	備考
1	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	粘性あり	住居内堆積土
2	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	やや粘性あり	〃
3	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	やや粘性あり	〃
4	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	粘性あり	周溝内堆積土
5	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	粘性あり；褐色(7.5YR 4/6)の小ブロック混入	〃
6	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	浅黄橙色(7.5YR 8/6)、褐色(7.5YR 4/6)を多量に混入	〃
7	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	粘性あり、黒褐色(7.5YR 3/1)を混入	炉構築土・炉内堆積土
8	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	炭化物混入	炉石組周辺堆積土
9	暗褐色(10YR 3/3)	〃	明赤褐色(2.5YR 5/6)の小ブロック少量混入	炉構築土・炉内堆積土
10	暗褐色(10YR 3/3)	〃	砂粒を少量混入	石組遺構内堆積土

層No.	土色	土性	混入物・その他	備考
11	暗褐色(10YR 3/3)	細砂シルト		炉掘り方堆積土
12	褐色(7.5YR 4/6)	シルト	焼土（焼面？）	〃
13	暗褐色(7.5YR 3/3)	砂質シルト		〃
14	暗褐色(7.5YR 3/3)	シルト		〃
15	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃	焼土・木炭を多量に混入	〃
16	暗褐色(7.5YR 3/3)	砂質シルト		〃
17	暗褐色(10YR 3/3)	シルト		〃
18	暗褐色(7.5YR 3/3)	シルト	焼土（焼面？）	〃
19	暗褐色(7.5YR 3/3)	砂質シルト		〃

第10図　第４住居跡

ほ平坦であるが、幾分住居の壁の方へ傾斜している。床面から周溝底面までの深さは10～20cmである。周溝内施設は検出されなかった。

（炉）住居跡南東部に位置し、長軸方向は北西－南東である。土器埋設石囲部・敷石石組部・掘り込み部から成る土器埋設石組複式炉である。全体の形は下ぶくらみの楕円形である。大きさは長軸2.2m、短軸1.1mである。土器埋設石囲部は埋設土器（深鉢形）とそれを囲む円形の石



第11図　第4住居跡出土遺物

（1～2　1層、3～6　2層、7．3層
8～11　4層、12～13　7層、
14．炉　埋設土器、15．石鏃、16　石匙）

組（長軸20cm前後の礫）から成る。土器埋設石囲部は埋設土器及びその周囲の石が焼けて赤味をおびている。敷石石組部は方形の石組部分とそれに囲まれた敷石部分から成る。石組部分は礫を数段積み上げており、奥壁の部分で比較的大きい石を使い、側壁の部分では長軸20cm程のものを数段、掘り込み部に接する部分では一段だけ組んでいる。敷石部分の石は数が少なく、まばらである。また、その中には土器片も一枚敷かれている。床面からの深さは約35cmある。敷石石組部は奥壁、側壁の石が顕著に焼けている。底面の石はあまり顕著でない。掘り込み部は丸底状で床面からの深さは20～30cmである。掘り込み部は火熱を受けた痕跡は観察されなかった。住居跡を断ち割ると掘り方が検出された。

（その他の施設）炉の長軸の延長上に方形の石組遺構がある。これは、長・短軸40～45cm、深さ約18cmの方形の掘り方を持つ。礫６個を組み合わせ、間隙に小礫を詰め込んだもので、全体の形は方形をしている。この遺構内には暗褐色土が堆積していたが、焼土、木炭等は顕著でなく、組まれた石にも焼けた痕跡は明確でなかった。

（出土遺物）堆積土から石鏃・石匙・凹石等が出土している。

（年代決定資料）炉埋設土器と敷石石組部に敷かれた土器が住居跡の年代を示す資料である。

⑤第５住居跡（第12図）

（遺構の確認）Ｎ－13区付近で黄褐色火山灰層の地山に暗褐色シルト層の分布を確認した。

（重複・増改築）第５土壙により住居跡北東部を切られている。また、西側部分が、土壙により切られている。

（平面形・方向）調査範囲に入る住居跡北側部分のみ発掘した。したがって全体的な平面形は不明である。

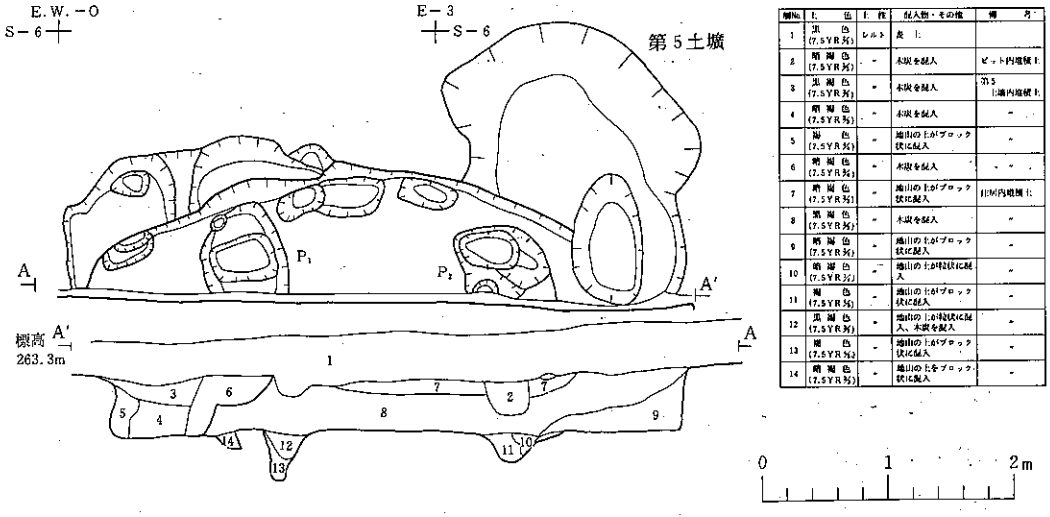
（堆積土）３層に分けられる。第１層は暗褐色シルト層で、住居跡中央部に堆積している。第２層は黒褐色シルト層で住居跡壁から中央部に堆積している。第３層は暗褐色シルト層で、住居跡壁近くに堆積している。

（壁）調査した北側部分のみ検出された。最も保存の良い北壁で床面からの高さは約60cmである。壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。壁は地山の黄褐色火山灰層である。

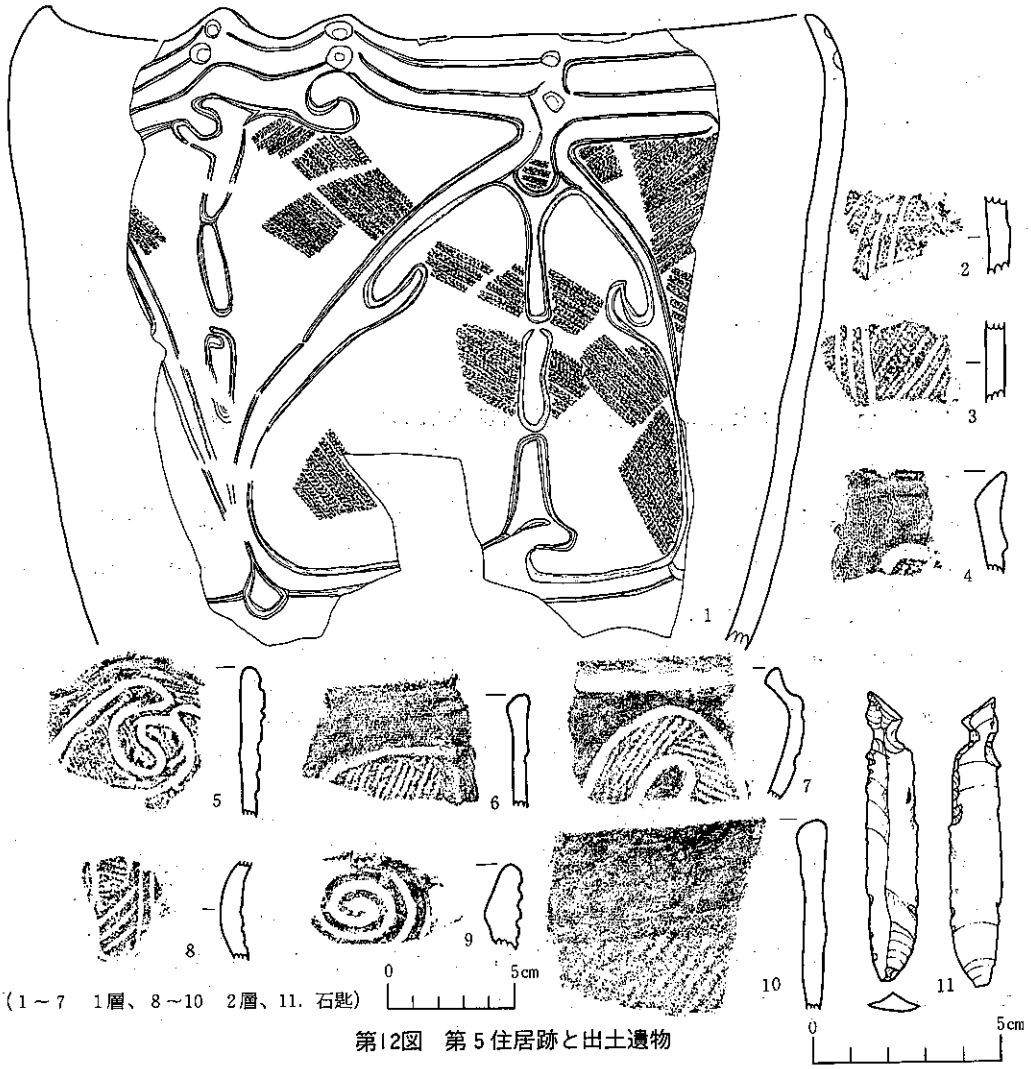
（床面）床面の一部を検出したのみで、ほぼ平坦である。東側部分が土壙により切られている。

（柱穴）２つのピットが検出され、P_1は掘り方と柱痕跡の識別ができた。P_2については、全体を明らかにできなかったので詳細は不明である。

（周溝）住居跡の壁に沿って周溝が断続的に検出された。幅は20～30cmで、凹凸がある。床面から周溝底面までの深さは15～20cmである。



層No	土　色	土　性	混入物・その他	備　考
1	黒　色 (7.5YR 3/1)	レルト	表　土	
2	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃	本炭を混入	ピット内埋積土
3	黒褐色 (7.5YR 3/1)	〃	本炭を混入	第5土壙内埋積土
4	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃	本炭を混入	〃
5	褐　色 (7.5YR 4/4)	〃	地山の土がブロック状に混入	〃
6	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃	本炭を混入	〃
7	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃	地山の土がブロック状に混入	住居内埋土
8	黒褐色 (7.5YR 3/1)	〃	本炭を混入	〃
9	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃	地山の土がブロック状に混入	〃
10	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃	地山の土が粒状に混入	〃
11	褐　色 (7.5YR 4/4)	〃	地山の土がブロック状に混入	〃
12	黒褐色 (7.5YR 3/1)	〃	地山の土が粒状に混入、本炭を混入	〃
13	褐　色 (7.5YR 4/4)	〃	地山の土がブロック状に混入	〃
14	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃	地山の土がブロック状に混入	〃



（1～7　1層、8～10　2層、11. 石匙）

第12図　第５住居跡と出土遺物

（炉）不明

（出土遺物）堆積土から土器片の他に石匙などが出土している。

（年代決定資料）住居跡の一部分しか掘っていないので決定的な遺物はないが、床面付近の遺物が住居跡の年代を考える資料となる。

（２）土壙

①第１土壙（第13・14図、写真３－１）

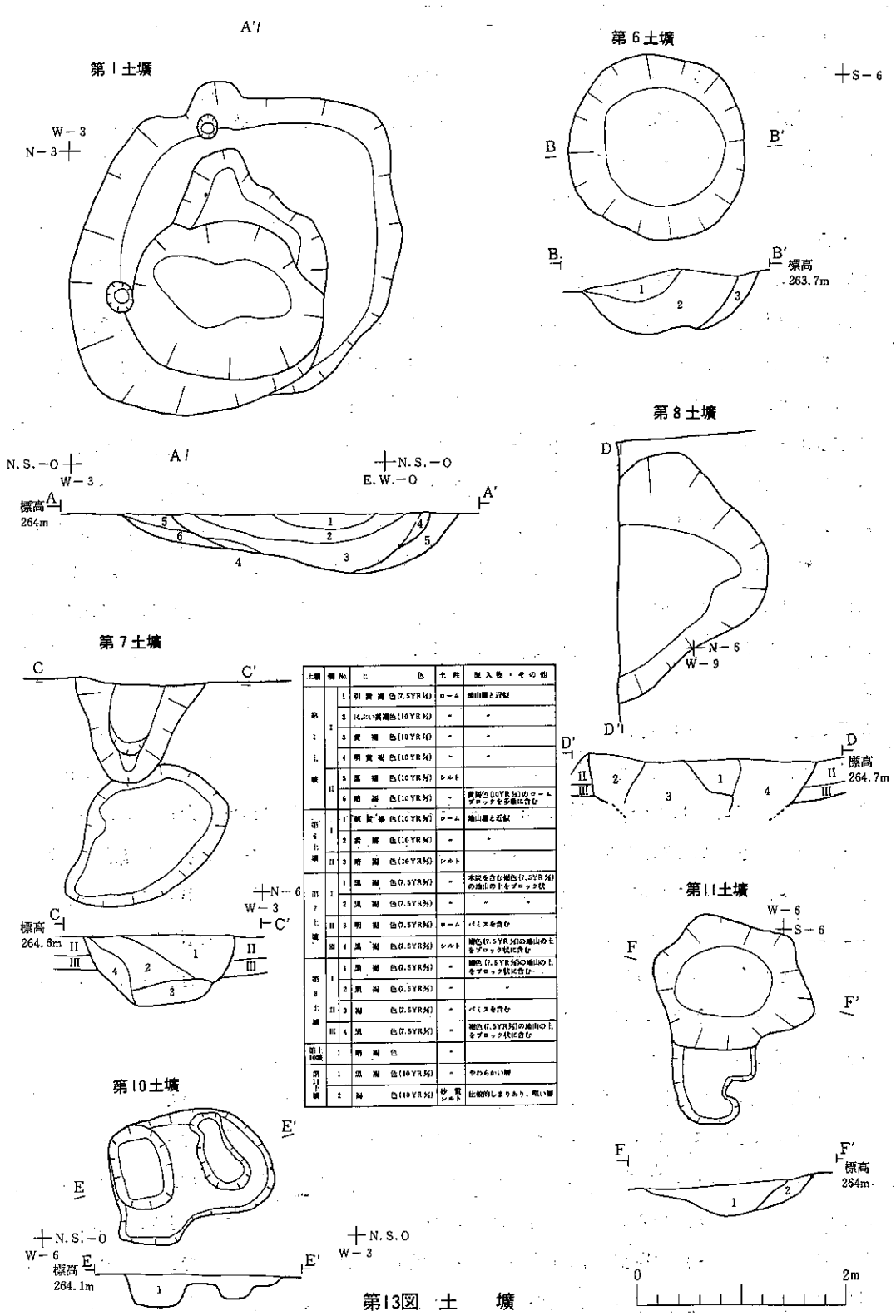
Ｍ－10区付近の第２層中で確認された。他の遺構との重複はなかった。平面形は歪んだ隅丸方形で、遺構確認面における大きさは、長軸・短軸約3.0mで、深さは約0.5mである。壁は緩やかに立ち上がる。北側では途中、小さな平坦面を形成するが、南側は北側に比べ、幾分急角度でそのまま立ち上がる。北側と西側の壁面にはそれぞれピットが１個づつある。底面はほぼ滑らかな擂り鉢状をしている。堆積土は６層確認されたが、大別すると２層になる。第Ⅰ層は土壙中央部に堆積する黄褐色火山灰層である。第Ⅱ層は壁際にのみ薄く堆積する黒ないし黒褐色シルト層である。堆積土の大部分は第Ⅰ層で、第Ⅱ層が壁際に薄く入り込んだ形になっている。遺物は第Ⅰ層の黄褐色火山灰層群からも僅かに出土しているが、大部分のものは第Ⅱ層の黒ないし暗褐色シルト層から出土している。全体の出土量はあまり多くなく、出土状況も不規則である。

②第２土壙（第５・14図、写真３－２）

Ｎ－８区の第４層（黄褐色火山灰層）上面で黒色土の分布を確認した。土壙の南東部が時期不明のピットに切られている。平面形はほぼ円形で、遺構確認面における大きさは、長・短軸約１mで、深さは約0.3mである。壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がり、上端近くになると平坦面を形成し緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、数個の礫が検出された。堆積土は黒色ないし黒褐色の土層が７層確認されたが、大別すると第Ⅰ層が黒色土層、第Ⅱ層が黒褐色土層になる。炭化物が全体的に含まれており、焼土を含む層も見られる。遺物は第Ⅰ層から多く出土しており、その状況は不規則である。

③第３土壙（第７・14図）

Ｎ－12区付近の黄褐色火山灰層上面で確認された。第２住居跡を切っている。平面形は隅丸方形で、確認面での大きさは、長軸約2.4m、短軸約1.8mで、深さは約0.5mである。壁はゆるやかに立ち上がる。西側には壁にくい込む３つのピットがみられた。底面は擂り鉢状をしており、ほぼ中央にピットが認められる。堆積土は、大別すると３層認められた。第Ⅰ層は黒褐色シルト層で、土壙の北～東の壁沿いに堆積している。第Ⅱ層は黄褐色火山灰層で、土壙の中央部に堆積する。第Ⅲ層は黒褐色ないし暗褐色シルト層で、土壙の西～南側に堆積している。遺物は



土壙	層	No.	土色	土性	混入物・その他
第1土壙	I	1	明黄褐色(7.5YR5/6)	ローム	地山層と近似
		2	比較的黄褐色(10YR5/6)	〃	〃
		3	黄褐色(10YR5/6)	〃	〃
		4	明黄褐色(10YR5/6)	〃	〃
	II	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
		6	暗褐色(10YR3/3)	〃	黄褐色(10YR5/6)のロームブロックを多量に含む
第6土壙	I	1	明黄褐色(10YR5/6)	ローム	地山層と近似
		2	黄褐色(10YR5/6)	〃	〃
	II	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
第7土壙	I	1	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	木炭を含む褐色(7.5YR5/6)の地山の土をブロック状
		2	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	〃 〃
	II	3	明褐色(7.5YR5/6)	ローム	パミスを含む
	III	4	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	褐色(7.5YR5/6)の地山の土をブロック状に含む
第8土壙	I	1	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	褐色(7.5YR5/6)の地山の土をブロック状に含む
		2	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	〃
	II	3	褐色(7.5YR4/6)	〃	パミスを含む
	III	4	黒色(7.5YR3/1)	〃	褐色(7.5YR5/6)の地山の土をブロック状に含む
第11土壙		1	明褐色	〃	
第10土壙		1	黒褐色(10YR3/2)	〃	やわらかい層
		2	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	比較的しまりあり、硬い層

第13図 土　壙

第Ⅲ層にのみ検出された。そして、この層に第２住居跡の炉石と思われる石等が、不規則な状態で検出された。

④第４土壙（第９・14図）

０－18区付近の黄褐色火山灰層上面で確認された。第３住居跡を切っている。平面形はほぼ楕円形で確認面での大きさは、長軸約1.2m、短軸約1.0mで、深さは約0.4mである。壁は、西側がほぼ垂直に立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。底面の状況は西側が深く落ち込んでおり、東側は西側に傾斜する平坦面となっている。底面には炭化物が付着しており、礫が数個不規則にみられる。堆積土は３層になる。第１層は黒褐色シルト層、第２層は暗褐色シルト層、第３層は褐色シルト層である。第２層には炭化物が混入している。遺物は第１・２層に含まれ出土状況も不規則である。

⑤第５土壙（第12・14図）

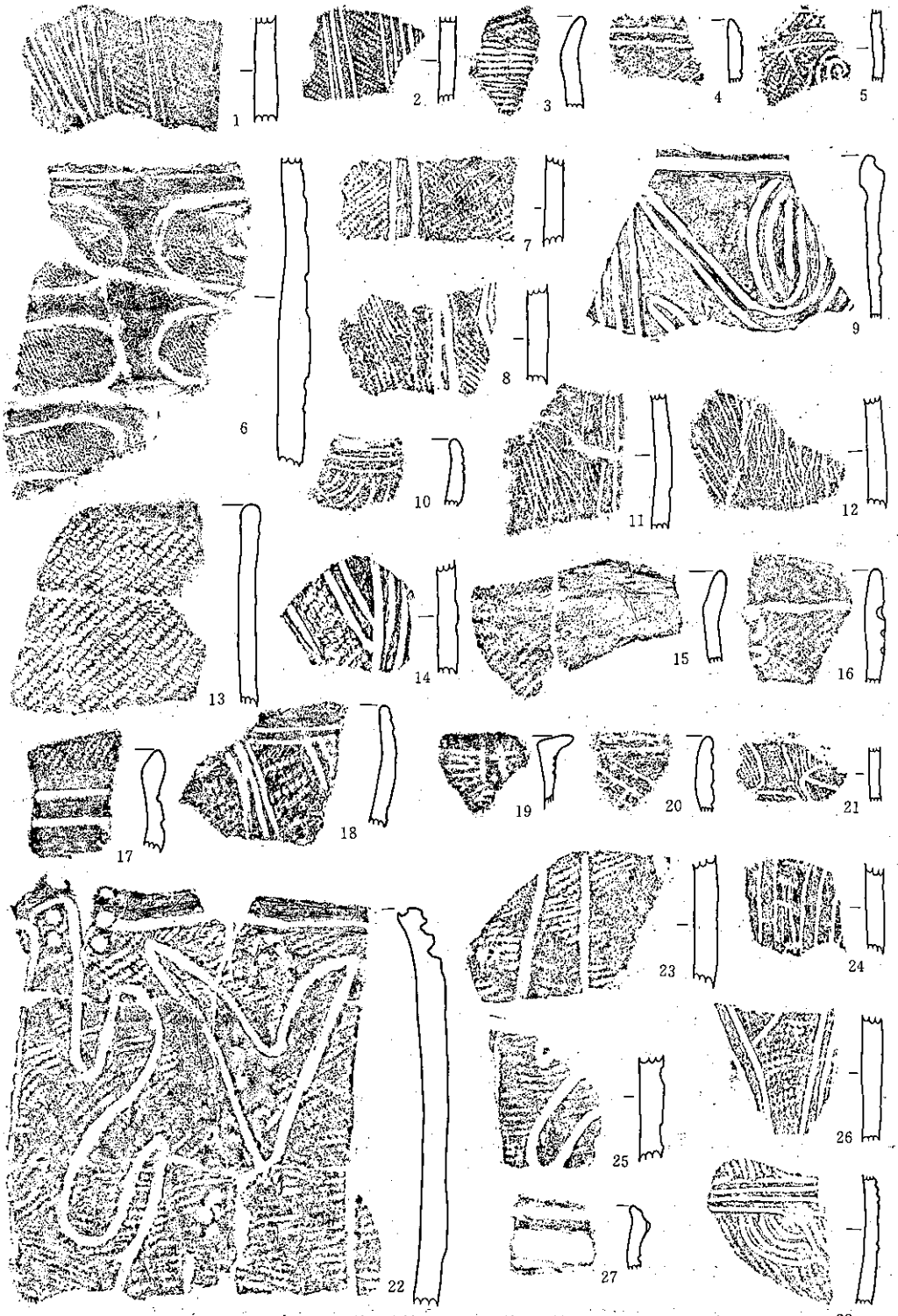
０－13区の黄褐色火山灰層上面で遺構を確認した。第５住居跡を切っている。平面形は、土壙が調査範囲外に延びるため不明であるが、調査分だけから見ると歪んだ楕円形かと思われる。遺構の確認面における大きさは、長軸約2.2m、短軸約1.9m、深さは約0.5mである。壁は東側で急な部分もあるが、他は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ滑らかな擂り鉢状をしており、長軸１m、短軸0.5mのピットが検出された。堆積土は大別すると２層で、第Ⅰ層は褐色火山灰層で土壙の中央部から南側に堆積している。東側では壁の地山との区別が困難な状態で堆積していた。第Ⅱ層は黒褐色ないし暗褐色シルト層で、北～西の壁際に堆積している。遺物は第Ⅱ層の暗褐色ないし黒褐色の層に含まれる。また、長軸20cm程度の礫が不規則な状態でかなり検出された。

⑥第６土壙（第13・14図）

Ｌ－13区付近の黄褐色火山灰層上面で確認した。他の遺構との重複は認められない。平面形は円形で、長・短軸約1.7m、深さは約0.5mである。壁は比較的急角度であるが緩やかに立ち上がる。底面は南側が幾分低い丸底状をしている。堆積土は２層に大別される。第Ⅰ層は黄褐色火山灰層で、北側の壁際を除き土壙全体に堆積している。第Ⅱ層は暗褐色シルト層で、北側の壁際に薄く堆積している。また、南壁の地山層と第Ⅰ層の層相は近似しており、識別が困難である。遺物は第Ⅱ層の暗褐色シルト層から少量出土したが、その状況に規則性は認められない。

⑦第７土壙（第13・14図）

Ｌ－８区付近の第２層上面で遺構が確認された。この土壙の南側に長軸約1.7m、短軸約1.2mの凹みがあるが、この土壙はこの凹みを切っている。南側の一部を検出しただけでその北側部分は用地外に延びており、全体の形はわからない。調査部分は、頂部の丸いふくらみをもった三角形状をしており、全体形は歪んだ楕円形でないかと推定される。残存部の大きさは、それ



第14図　土壙内出土遺物（1～5　第1土壙、6～9　第2土壙、10～12　第3土壙
13～14　第4土壙、15～19　第5土壙、20～21　第6土壙
22～26　第8土壙、27～28　第10土壙）

ぞれの辺が約0.9m、約1.2m、約0.9m、で、深さ約0.7mである。壁は緩やかであるが、比較的急角度で立ち上がる。壁は滑らかに立ち上がる部分（東・西側）と、途中小さな平坦面を形成する部分（南側）がある。底面は、幾分小さな凹凸はあるが全体として滑らかな丸底状をしている。堆積土は２層で、明褐色土層と黒褐色土層である。大部分は地山の黄褐色火山灰をブロック状に含む黒褐色土である。そして、土壙底面にのみパミスを含む明褐色土が堆積していた。遺物は出土していない。

⑧第８土壙（第13・14図）

Ｋ－８区付近の第２層上面で遺構が確認された。調査区内において他の遺構との重複関係はない。この土壙の西側は用地外に延びているため全体の形は不明である。調査部分は隅丸長方形状のものが斜めに切られた形をしている。大きさは（調査分）長軸約2.0m、短軸約1.8m、深さ0.5m（未完掘）である。壁は比較的急角度で立ち上がる。底面の状況は完掘していないため不明である。堆積土は２層に大別され、壁沿いには黒色・黒褐色シルト層が堆積し、中央部には褐色土（地山の火山灰土と近似したもの）が堆積している。遺物は少量出土しているが、規則性は認められない。

⑨第９土壙（第13・14図）

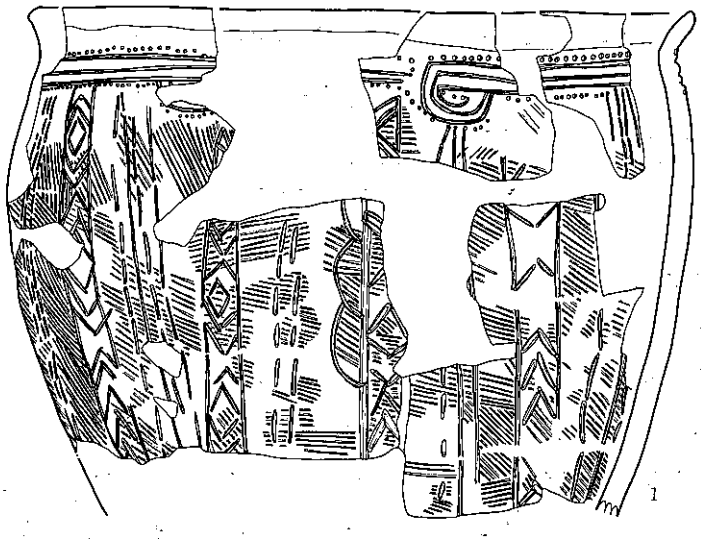
Ｊ－10区付近の第２層上面で遺構が確認された。調査区内において他の遺構との重複は認められない。調査区西壁断面にかかっているが、用地外のため精査できなかった。断面観察の結果、堆積土は２層に大別される。壁沿いには黒色・黒褐色土が堆積し、中央部に褐色土（地山の火山灰層に近似している）が堆積している。土壙の南側では黒色・黒褐色土が厚く見られる。

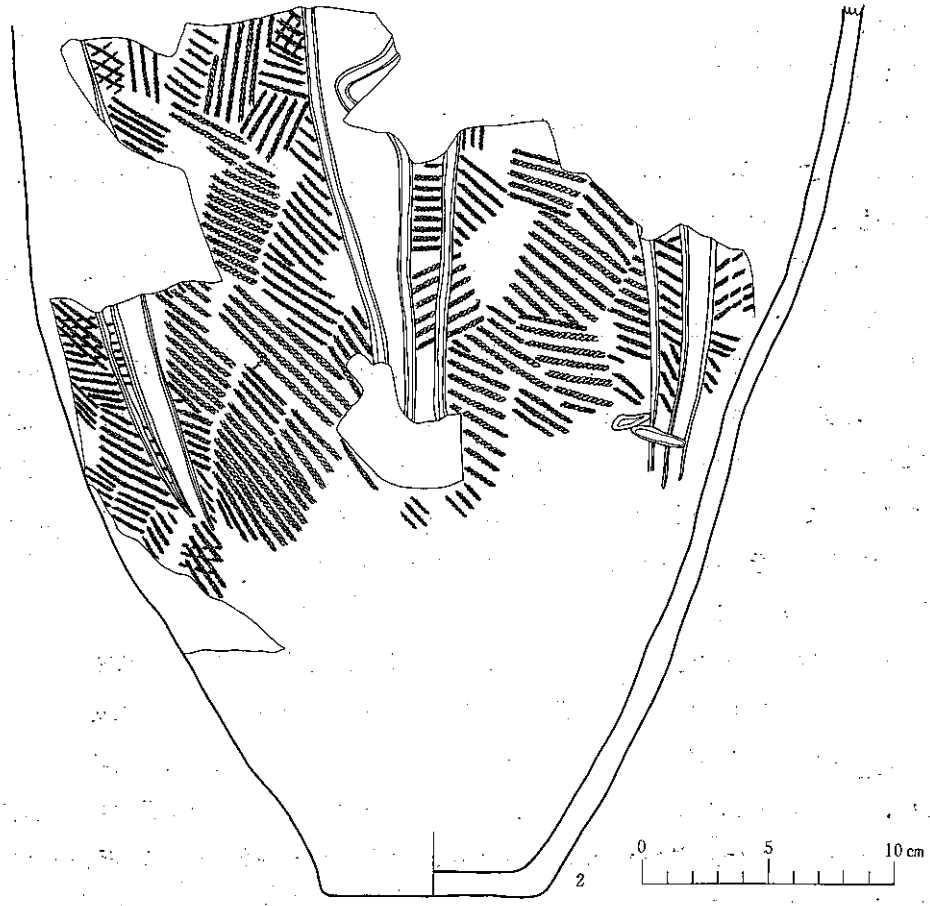
⑩第10土壙（第13・14図）

Ｌ－10区付近の黄褐色火山灰層上面で遺構が確認された。この土壙の東側に浅い凹みがあるが、重複の新旧関係については不明である。遺構確認面での大きさは長軸約0.8m、短軸約0.6m、深さ約0.3mで、平面形は隅丸長方形である。底面はほぼ平坦で、壁への立ち上がり部分がやや丸味をもっている。堆積土は、暗褐色シルト層の１層である。壁は急角度で立ち上がり、土壙上部では垂直に近くなっている。遺物は土器片と剥片が数点出土している。

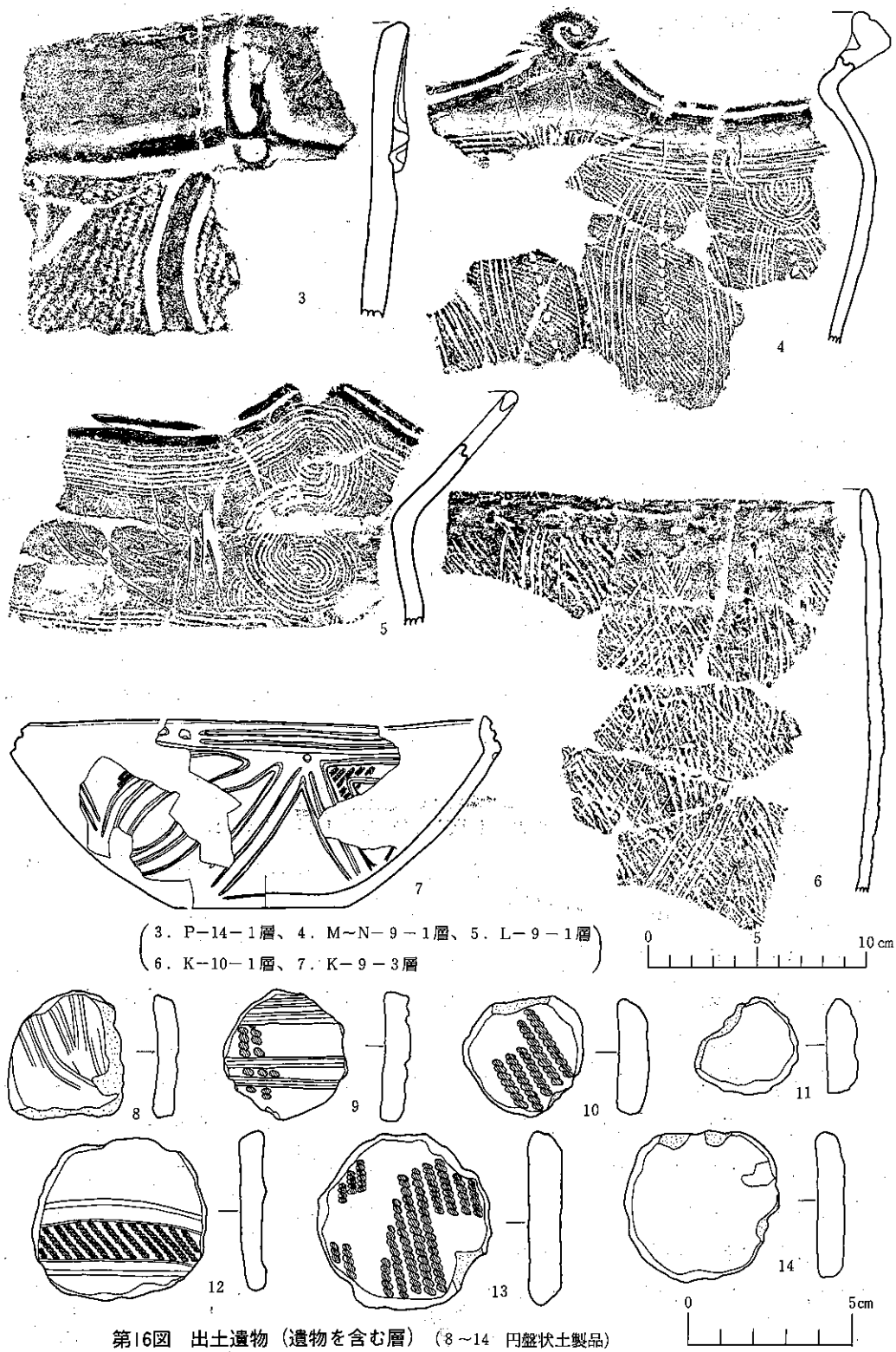
⑪第11土壙（第13・14図）

Ｋ－13区付近の黄褐色火山灰層上面で遺構が確認された。この土壙の両側が凹み状をしているが、これがこの土壙の張り出し部分なのか、それとも他の遺構との重複なのか確認できなかった。張り出し状の部分を除くと、非常に歪みの強い楕円形をしている。遺構確認面での大きさは、長軸約1.6m、短軸約1.3m、深さ約0.4mである。壁の状況を見ると、北側は比較的急角度で立ち上がる。南側は非常に緩やかに立ち上がる。底面は凹凸はあるが、丸底状をしている。堆積土は２層に分かれる。第１層は黒褐色シルト層で、西側の壁際を除き、土壙全体に堆積して





第15図　出土遺物（遺物を含む層）（1．K－9－1層、2．L－9－2層）



（3．P−14−1層、4．M〜N−9−1層、5．L−9−1層
6．K−10−1層、7．K−9−3層）

第16図　出土遺物（遺物を含む層）（8〜14　円盤状土製品）

いる。第２層は褐色の砂質シルト層で西側の壁際に薄く堆積している。遺物は少量出土しているが規則性は認められない。

Ⅴ　考　　察

１．遺　物

この調査で発見された遺物としては、土器、円板状土製品、石製品がある。

①土　器

土器は平箱にして約30箱分ある。現在、整理中なので詳細な内容は報告できない。ここでは各遺構から出土したものを中心に検討してみた。

特徴的文様表現技法、文様展開について観察すると、次のようなものがある。

Ａ．文様をもつもの：これらのものは文様区画に沿って、縄文のある部分とない部分を交置した磨消縄文がみられるもの。

１．太い沈線文によって、楕円文や渦巻文で縦方向に文様が展開するもの。（第８図２・３、第11図３）

２．隆起線や隆帯によって横方向に文様が展開するもの。（第５図５・６、第７図１・２、第11図２・４～９・11・12）

３．頂面に凹みや刻線をもつ隆起線文によって、縦もしくは横方向に展開する文様の描かれるもの。（第11図１、第12図４・６、第16図３）

４．細い沈線文・列点文・破線状沈線文によって、縦方向に展開する文様の描かれるもの。第12図１、第16図７は磨消縄文の消し残しがみられるが、これは、この時期の特徴である。（第16図４・５・７、第12図１～３・５・８・９、第14図１～12・14・16～28、第15図１・２）

Ｂ．地文のみのもの

１．地文が縄文のもの（第14図13・15、第５図３、第14図10、第９図１、第11図14、第12図10）

２．地文が条線文のもの（第16図６）

以上の土器群を出土状況により検討すると、Ａ－１・２は、竪穴住居群から発見され、Ａ－３・４・５は、基本層位第２層と土壙群から出土している。第２層は、竪穴住居跡確認面よりも上層にあることから、Ａ－３・４・５はＡ－１・２よりも新しいものと考えられる。

次にこれらの土器群について、従来の研究成果と比較してみたい。

Ａ－１の特徴をもつ土器群は青島貝塚（後藤他：1975）や上深沢遺跡（宮城県教：1978）で多量に出土しており、縄文時代中期の大木９式に位置づけられている。

Ａ－２の特徴をもつ土器群は中沢遺跡（後藤他：1972）で竪穴住居群とともに出土しており、

縄文時代中期の大木10式に位置づけられている。

Ａ－３の土器と同様なものは類例に乏しい。比較的類似したものが貝鳥貝塚（草間・金子：1971）や袖窪貝塚（林：1965）で出土しており、門前式・袖窪式とされている。

Ａ－４の特徴をもつ土器は広く東北地方から関東地方に分布している。東北では南境式、宮戸Ｉｂ式、関東では堀之内Ｉ式の土器とされている。（伊東：1958、後藤：1974、山内：1967）

②石　器

出土した石器としては、剥片石器・磨製石器・礫石器がある。剥片石器としては石鏃・石匙・石錐・不定形石器などがある。磨製石器としては、磨製石斧・小形磨製石斧状石器がある。礫石器としては凹石・磨石・敲石・石皿などがある。全体として、定形石器が少ないのに比して不定形石器・凹石の多さが目立つ。また、出土した剥片は非常に多く、第３住居跡周溝から20数点検出され、一部は接合された。

③円板状土製品

土器片を円板状に打ち欠いたり、周辺を研磨したりしている土製品が20数点出土している。遺構から発見されたものはない。

２．遺　構

ここでは発見された遺構のうち住居跡と土壙について若干検討してみたい。

（１）住居跡

発見された住居跡を見ると、すべて地山面で確認されている。平面形は円形を基調とするものが殆んどである。床面に貼り床の認められたものはなく、すべて地山の火山灰土を床面としている。また、殆んど周溝をもつものである。住居跡に設置された炉については不明の住居跡をのぞいて、すべて石組複式炉である。構造的には２つのタイプがある。

１タイプ：Ａ土器埋設石囲部、Ｂ敷石石組部、Ｃ石組部（掘り込み部）

２タイプ：Ａ土器埋設石囲部、Ｂ石組部Ｉ、Ｃ石組部Ⅱ

１タイプは上原型土器埋設石組複式炉である（丹羽：1971）。２タイプは、基本的には１タイプと同じ構造の複式炉である。

第４住居跡で炉の長軸延長上に方形の石組が検出されたが、このような構造をもつものとしては、川崎町中沢遺跡がある（後藤他：1972）。

次に各住居跡の年代について考えてみたい。第１住居跡はＡ－２類土器を出土していることから、縄文時代中期末（大木10式期）と考えられる。第２住居跡はＡ－１類土器を出土していることから、縄文時代中期後葉（大木９式期）と考えられる。第３住居跡は、決め手になる土器が出土しておらず、詳細な時期は不明である。しかし、上原型土器埋設石組複式炉の年代や第４土壙に切られていることなどからみると、縄文時代中期後葉（大木９～10式期）と考えら

れる。第４住居跡はＡ－２類土器を出土していることから、縄文時代中期後葉（大木10式期）と考えられる。第５住居跡は詳細は不明である。

（2）土　壙

土壙は11基確認されたが、堆積土の状況から、２つのタイプに分類できる。

①土壙内に黒色ないし黒褐色土等が堆積している土壙：第２・４・７・10土壙

②土壙内に黄褐色火山灰質土が堆積している土壙：第１・３・５・６・８・９・11土壙

①のタイプの中でも、第２土壙と第４土壙は、堆積土に炭化物を含み、底面に礫がみられることなどから、同じような性格の土壙であると考えられる。どちらもＡ－３～４類土器を出土しており、縄文時代後期前葉のものと考えられる。第７土壙は遺物が出土しておらず、時期が不明である。第10土壙はＡ－４類土器を出土しており、縄文時代後期前葉のものと考えられる。いずれも性格は不明である。

②のタイプの土壙についてみると、第11土壙以外すべて、Ａ－３～４類土器を出土しており、縄文時代後期前葉のものと考えられる。これらの土壙は堆積土に地山の黄褐色火山灰層とほとんど変わらない土層がみられる。また、壁際に黒褐色土の層が薄く見られる。この壁際の黒褐色土が見られない場合は、底面との区別が困難な場合もある。人為的か、自然的か不明であるが、大きな礫が不規則に多く検出されているものもある。このような土壙は各地に類例がみられ、「性格不明の落ち込み」とか「ローム盛土土壙」などとして報告されている（谷井・宮崎：1973）。そして、この土壙の性格については、風倒木痕であるとする考えなどがあるが（能登：1974）、まだ、定着した考えはない。

Ⅵ　ま　と　め

１．本遺跡は、碁石川の支流である轟川の河岸段丘上に立地している。

２．調査により竪穴住居跡、土壙等が発見され、縄文時代中期後葉から後期前葉に属する集落跡であることが明らかになった。

３．発見された遺物には、縄文土器、円板状土製品、石器等がある。土器は大きく分けると、縄文時代中期後葉に属するものと、後期前葉に属するものがある。石器としては、石鏃・石匙・石錐等の剥片土器と磨製石斧・凹石・石皿等がある。

４．発見された住居跡は不明の住居跡を除いて、すべて石組複式炉をもつものであり、縄文時代中期後葉に属する。これは、東北地方南部の特色を示すものである。

５．発見された土壙には２つのタイプがある。炭化物を含む黒色ないし暗褐色土を堆積している土壙と黄褐色火山灰質土を堆積している土壙である。いずれも縄文時代後期前葉に属するものである。これらの性格については、十分明らかにできなかった。

〔参考文献〕（五十音順）

伊東信雄（1958）：「古代」『宮城県史』１

草間・金子他（1971）：『貝鳥貝塚』

経済企画庁総合開発局（1972）：『土地分類図（宮城県）』

後藤勝彦（1974）：「縄文後期宮戸Ｉｂ式周辺の吟味－南境貝塚出土の土器をもとにして－」『東北の考古・歴史論集』

後藤他（1970）：「下窪遺跡」『釜房ダム水没遺跡発掘調査概報』

〃　（1972）：「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史（資料編）』

〃　（1975）：「青島貝塚」『南方町史（資料編）』

小山・竹原（1967）：『新版標準土色帳』

志間他（1970）：「下原遺跡」『釜房ダム水没遺跡発掘調査概報』

谷井・宮崎（1973）：「坂東山」『埼玉県遺跡発掘調査報告書』第２集

丹羽茂（1971）：「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会研究紀要』第１冊

能登健（1974）：「発掘調査と遺跡の考察」『信濃』26－3

林謙作（1965）：「東北」『日本の考古学』Ⅱ

宮城県教委（1976）：「遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集

〃　（1976）：「遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集

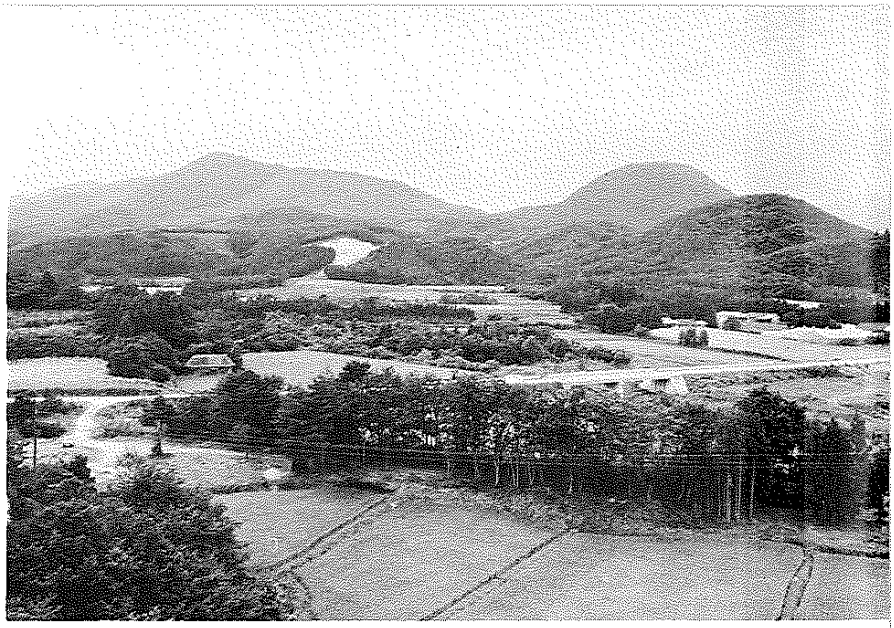
宮城県教委（1978）：「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集

山内清男（1967）：「日本先史土器図譜」『山内清男・先史考古学論文集』

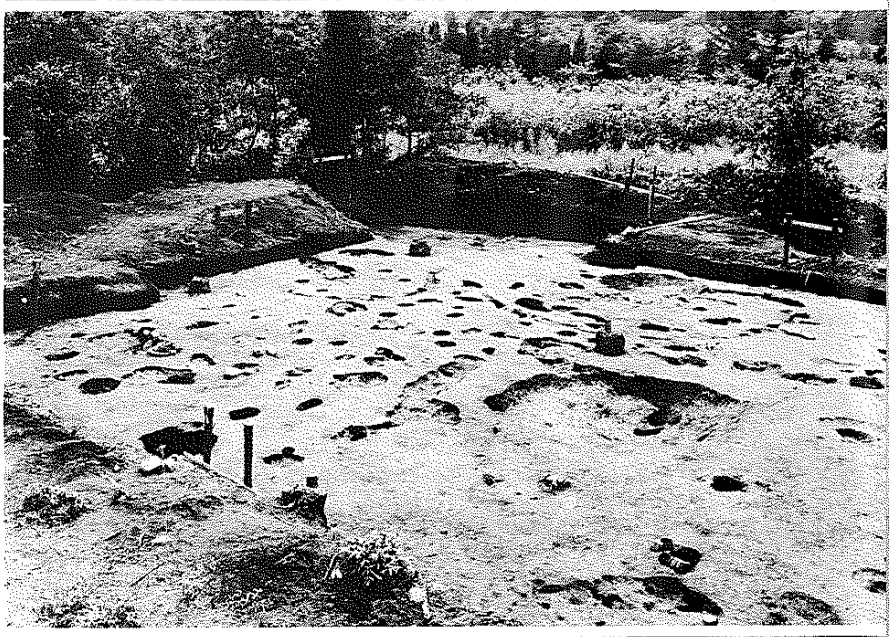
宮城県文化財保護課職員一覧（昭和52年度）

課　長		千葉与一郎	調査第１係	技術主幹		調査第２係	係　長	佐々木茂禎
課長補佐		木村三智夫		兼係長	後藤　勝彦		技術主査	平沢英二郎
管理第１係	係長	加藤　忠雄		技術主査	高橋　多吉		技　師	後藤　彪
	主事	矢ロセツ子		〃	早川　春一		〃	佐々木安彦
	〃	三浦　正義		技　師	小井川和夫		〃	加藤　道男
管理第２係	主幹兼			〃	高橋　守克		〃	一条　孝夫
	係長	扇　正人		〃	丹羽　茂		〃	阿部　恵
	主事	佐藤　信子		〃	斎藤　吉弘		〃	手塚　均
	〃	渡辺　正憲		〃	佐藤　好一		〃	阿部　博志
				〃	遊佐　五郎			
				〃	千葉　宗久			
				〃	真山　悟			
				嘱　託	熊谷　幹男			
				〃	中島　直			

写 真 1

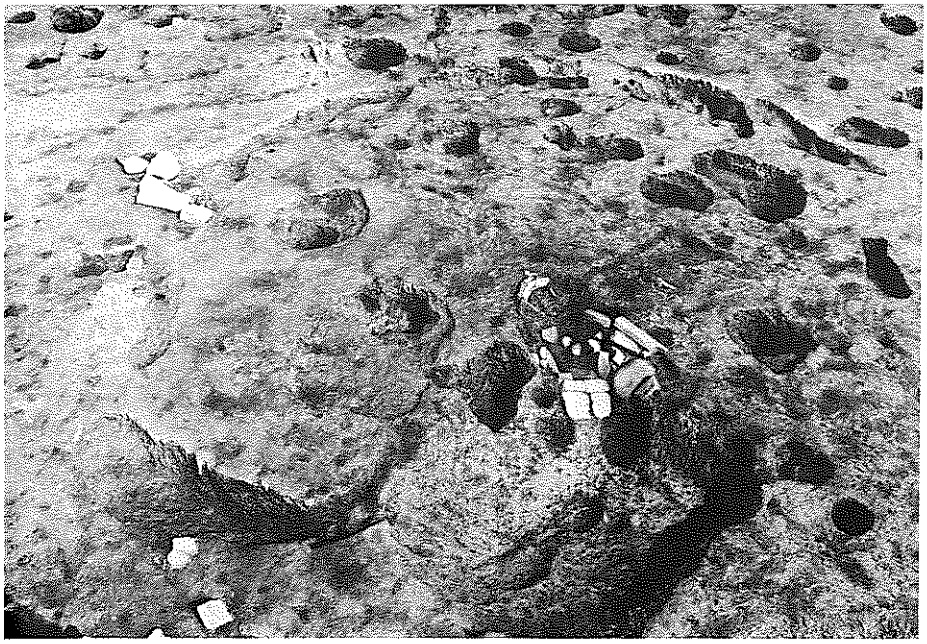


1．遺跡遠景
（南東から）

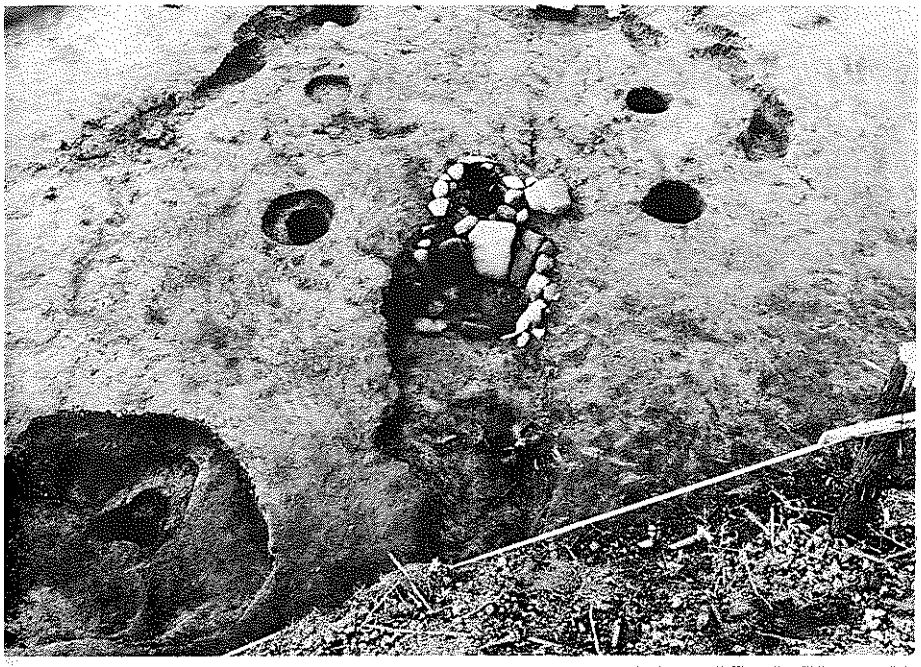


2．発掘区全景
（北西より）

3．第1住居跡
（東から）



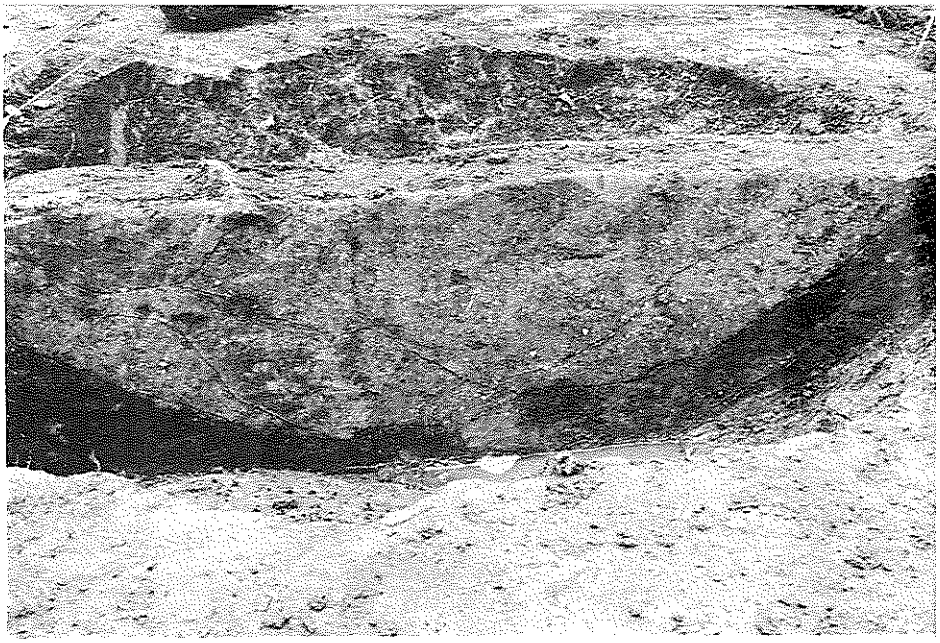
1．第2住居跡
（南より）



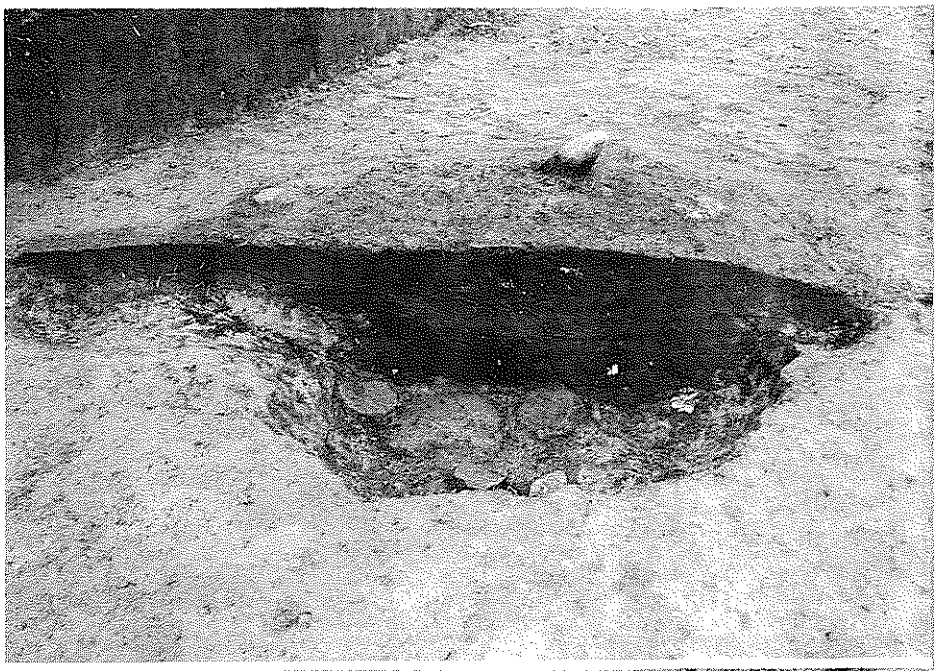
2．第3住居跡
（東より）

3．第4住居跡
（南東より）

写 真 3



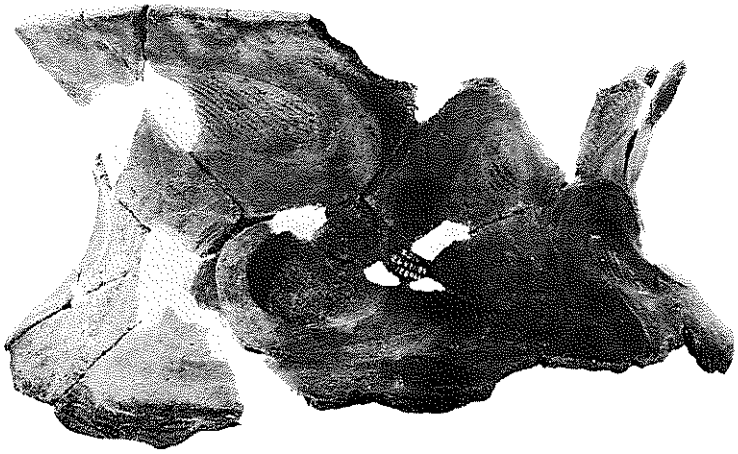
1．第1土壙
（東より）



2．第2土壙
（東より）

3．出土状況
（第1住居跡床面）

1．第1住居跡
炉埋設土器



2．第2住居跡
床面出土土器

3．石　器